

四国八十八ヶ所巡礼雑感

持山保信 著

まえがき

四国霊場八十八ヶ所巡りを始めたのは今から二十六年前の九十七年春のこと。お四国巡りなんか年寄りのすること、自分はまだまだ関係ない話、と決め込んでいたのに何故か突然私の巡礼は始まった。

「明日からお四国巡り始めるぞ、皆も一緒じゃ、準備しとけ！」の一言で嫁と次女も遍路のお供に決められたが、文句は出なかった。と言うより文句も言えなかった状況だったのかも知れない。

母の七回忌を翌年の三月に控えていたのが、巡礼開始の直接の理由である。

生前、母はバスツアーで巡礼をしていたが、その時は既に癌に犯されていた、それも骨盤に取り付いた癌とのことで、取り除く事ができない最悪のものであった。今でもはつきり覚えているが、巡礼結願の日に夜遅く我が家にたどり着いた時は殆ど立っておれない状態で玄関に座り込むや、そのまま動けなくなり三日後には入院となつてしまった。九十二年の秋のこと、年が明けて九十三年三月には他界してしまい、正に命と引き換えた巡礼の旅となつたのである。

その母がバスまでの送迎を私に頼む事があった。徳島駅前の集合場所までであるが、早朝三時の出発の時はさすがにタクシーを使ってくれと断った。近距離をしかかも朝早くタクシーを予約しては運転手に気の毒というのが母の本当の気持ちだった

のだらうが、わたしは薄情にも断つた。どうしてもと優しくしてやれなかつたのだらうかと、今もつて後悔している。

母が残した納経帳は棺に入れたが掛け軸は残つた、暫くそのまま保管していたが七回忌が近づいたある日、ふと考えた。母の残した大切なこの掛け軸を表装してあげよう、それに先駆けて自分も八十八ヶ所を廻ろう、母に冷たくした事がこれによつて少しは許してもらえるかも知れないと。

家族で廻るお四国は、それなりの価値のあるものとなつた。移動中の車の中では自ずと妻とコミュニケーションが図れるし、娘の社会科の勉強にもなつた筈である。四国は四つの県から出来ていて、景色も違えば風土や言葉も人柄も違つている事等々、父親の権威復活のチャンスまで与えてもらった次第である。

最初はスタンブラリー気分でのお寺巡りがそのうち次第に神妙になつてきて、山門を出入りする時は自然に一札するようになり、作法も見よう見真似で形に入つていくのが不思議でもあつた。

夏休みまでには全てのお寺をお参りし、最後に高野山奥の院の朱印を貰つた時は、家族でなにかの充実感を分かち合えた喜びに浸つたものである。

翌年の七回忌の法要に例の掛け軸を使った事は云うまでもない。手を合わせながら、遅過ぎた親孝行を恥かしくも思つたが、母はきつと許してくれたに違いないとも思つた。

その後、私は毎年巡礼をするようになり、今年はもうすぐ十六回目の遍路が終わる。般若心経も随分うまくなったが、やはり最初の巡礼が一番敬虔な気持ちであったような気がする。

平成二十五年九月吉日

目次

まえがき

目次

徳島県 発心の道場

一番 霊山寺 (りょうぜんじ)

二番 極楽寺 (ごくらくじ)

三番 金泉寺 (こんせんじ)

四番 大日寺 (だいにちじ)

五番 地藏寺 (じぞうじ)

六番 安楽寺 (あんらくじ)

七番 十楽寺 (じゅうらくじ)

八番 熊谷寺 (くまだにじ)

九番 法輪寺 (ほうりんじ)

十番 切幡寺 (きりはたじ)

十一番 藤井寺 (ふじいでら)

1 4 11 12 14 16 17 19 20 22 24 26 27 29

目次

十二番	焼山寺（しょうざんじ）	30
十三番	大日寺（だいにちじ）	32
十四番	常楽寺（じょうらくじ）	33
十五番	国分寺（こくぶんじ）	34
十六番	観音寺（かんのんじ）	36
十七番	井戸寺（いどじ）	37
十八番	恩山寺（おんざんじ）	38
十九番	立江寺（たつえじ）	39
二十番	鶴林寺（かくりんじ）	40
二十一番	太龍寺（たいりゅうじ）	41
二十二番	平等寺（びやうどうじ）	43
二十三番	薬王寺（やくおうじ）	44
高知県	修行の道場	47
二十四番	最御崎寺（ほつみさきじ）	48
二十五番	津照寺（しんしょうじ）	49

二十六番	金剛頂寺（こんごうちょうじ）	50
二十七番	神峰寺（こうのみねじ）	51
二十八番	大日寺（だいにちじ）	52
二十九番	国分寺（こくぶんじ）	53
三十番	善楽寺（ぜんらくじ）	54
三十一番	竹林寺（ちくりんじ）	56
三十二番	禅師峰寺（ぜんじぶじ）	57
三十三番	雪蹊寺（せつけいじ）	58
三十四番	種間寺（たねまじ）	60
三十五番	清瀧寺（きよたきじ）	62
三十六番	青龍寺（しゅうりゅうじ）	64
三十七番	岩本寺（いわもとじ）	65
三十八番	金剛福寺（こんごうふくじ）	66
三十九番	延光寺（えんこうじ）	67
愛媛県	菩提の道場	69

目次

四十番	観自在寺 (かんじざいじ)	70
四十一番	龍光寺 (りゅうこうじ)	71
四十二番	仏木寺 (ぶつもくじ)	73
四十三番	明石寺 (めいせきじ)	75
四十四番	大宝寺 (だいほうじ)	76
四十五番	岩屋寺 (いわやじ)	77
四十六番	浄瑠璃寺 (じょうるりじ)	79
四十七番	八坂寺 (やさかじ)	80
四十八番	西林寺 (さいりんじ)	81
四十九番	浄土寺 (じょうどじ)	82
五十番	繁多寺 (はんたじ)	84
五十一番	石手寺 (いしてじ)	85
五十二番	太山寺 (たいさんじ)	86
五十三番	円明寺 (えんみょうじ)	87
五十四番	延命寺 (えんめいじ)	88

五十五番	南光坊 (なんこうぼう)	90
五十六番	泰山寺 (たいさんじ)	92
五十七番	栄福寺 (えいふくじ)	93
五十八番	仙遊寺 (せんゆうじ)	94
五十九番	国分寺 (こくぶんじ)	95
六十番	横峰寺 (よこみねじ)	96
六十一番	香園寺 (こうおんじ)	98
六十二番	宝寿寺 (ほうじゅじ)	104
六十三番	吉祥寺 (きちじょうじ)	106
六十四番	前神寺 (まえがみじ)	107
六十五番	三角寺 (さんかくじ)	108
香川県	涅槃の道場	109
六十六番	雲辺寺 (うんぺんじ)	110
六十七番	大興寺 (だいこうじ)	111
六十八番	神恵院 (じんねいん)	112
	・六十九番 観音寺 (かんおんじ)	

目次

七十番	本山寺（もとやまじ）	113
七十一番	弥谷寺（いやだにじ）	114
七十二番	曼荼羅寺（まんだらじ）	117
七十三番	出釈迦寺（しゅっしやかじ）	119
七十四番	甲山寺（こうやまじ）	120
七十五番	善通寺（ぜんつうじ）	122
七十六番	金蔵寺（こんぞうじ）	123
七十七番	道隆寺（どうりゆうじ）	124
七十八番	郷照寺（ごうしょうじ）	125
七十九番	高照院（こうしょういん）	126
八十番	国分寺（こくぶんじ）	127
八十一番	白峰寺（しろみねじ）	129
八十二番	根来寺（ねごろじ）	130
八十三番	一宮寺（いちのみやじ）	131
八十四番	屋島寺（やしまじ）	132

目次

八十五番	八栗寺（やくりじ）	134
八十六番	志度寺（しどじ）	135
八十七番	長尾寺（ながおじ）	136
八十八番	大窪寺（おおくぼじ）	137
あとがき		139

徳島県
一番
（
二十三番
）
発心の道場

一番 霊山寺（りょうぜんじ）

次女、春奈が来年は大学受験だから十五回目の巡礼は彼女の合格祈願だと勝手に決めたまでは良かったのだが、肝心の彼女の反応はそっけない。

納経帳は大きいのが良いか、小さいのが良いか迷ったので本人に聞えば「なんで、そんなん、いるん」の一言。

「親の心子知らず、子の心親知らず」か、はたまた、お為ごかしに勝手に八十八カ所巡礼を自分の為と云われて迷惑なのか。腹さえ立ってきたが、これもお大師様の御心とジツと我慢して結局、女房を連れて十五回目のスタートを切るべく霊山寺へ赴いた。

境内は相も変わらずお遍路さんで賑わっていたが納経所でご朱印を頂いた後、納



経料の三百円を差し出すと、現金はあちらのレジ係りでお願いしますと言われた。現金出納を厳格化したのか納経係の手を煩わさない為の配慮なのか、何故かしくくりしないまま少し離れたレジへと進むと何時もの愛想のないオバサンが「どうも有難うございます」と云ってくれる。何とも割り切れない気分になったものだ。

「腹は立てず心は丸く」と遍路グッズの売り場の日本手拭には書いてあった。なるほどと思った。

南無大師遍照金剛

二番 極楽寺（ごくらくじ）

私の納経帳には四国遍路を結願したあかつきには一番はじめにお参りしたお寺にお礼参りをするようにと最後のページが用意されている。

一番さんの靈山寺で購入したものだから当然ながらお礼参りは靈山寺にといいことになるのだが、一番さんばかりではどうも納得が行かないので四回目の巡礼は二番極楽寺さんから始めてその後、一番・三番・四番・・・と巡礼をしたのだが二十五番・津照寺で、この手のお礼参りは不要であると教わった。

津照寺の納経書きの剣幕たるや、凄まじく「ワシは一番さんのやり口がとにかく気に入らんから、この手の納経帳を見つければ何時でも説教しているのだ」とのこと、私も彼のお話に三十分もお付き合いをさせられてしまった。

そもそも四国遍路は弘法大師様との二人連れ。そのお大師様は高野山奥の院にいらっしゃるので巡礼の最後には高野山にお礼参りする慣わしである。最初にお参りするお寺が何処であれ、一回の巡礼で二度目のお参りなど必要なし。とのご高説である。

しかして私の納経帳の最終ページにはその後、どこのお寺さんの朱印もなく靈山寺さんの三回分のみとなっている。

また、四回目の巡礼からは般若心経をきちんと納経しようと思ひ、初めて般若心経を読んだのもこのような経緯から極楽寺さんとなったが、あの日の清々しい気

持ちと何だか恥ずかしい気持ちには忘れられない思い出でもある。

その後十六回目の遍路をしている時に先達になろうと思いつき推薦を頂くために極楽寺のご住職にお願いすると快く応諾して下さった。程なく四国霊場会からは先達認定証が届いたまでは、よかったのだが先達選任研修を目前にしたその年の十一月に私は心筋梗塞で緊急入院し、先達の資格取得は叶わず、現在に至っている。幸いにも病気の発見が早く、この世に再び命を紡ぐことを許され、その後の回復も順調で従前にも増して元氣を取り戻したのだが、悪友が曰く。

「あんまり四国遍路を早く回っているとお迎えも早くなる・・・」

回数を重ねるだけの巡礼に少々の疑問を感じつつ、なおかつ自分に思い上がりが存在することにも気がついた私であった。これからはゆったりと巡礼させて頂くつもりだ。

南無大師遍照金剛

三番 金泉寺（こんせんじ）

金泉寺の駐車場は山門の左側にあり、そこからは直接に境内に通じる石造りの橋が架かっているものだから、どうしても山門をくぐらずに納経所へ行ってしまう。

ある日、山門をくぐらずにお参りは不敬とばかりにお参りの帰り道に山門を通過し一礼をして駐車場へと戻ってみた。

距離にして何メートルも違わないのに、どうしてこんなに爽やかな気持ちになれるのだろうかと感動した。

小さな努力を惜しんで大きな成果を求めるのも人の世の常だが、霊場廻りでもこの始末では私の将来において大きな成果はあまり期待出来そうもない。

南無大師遍照金剛

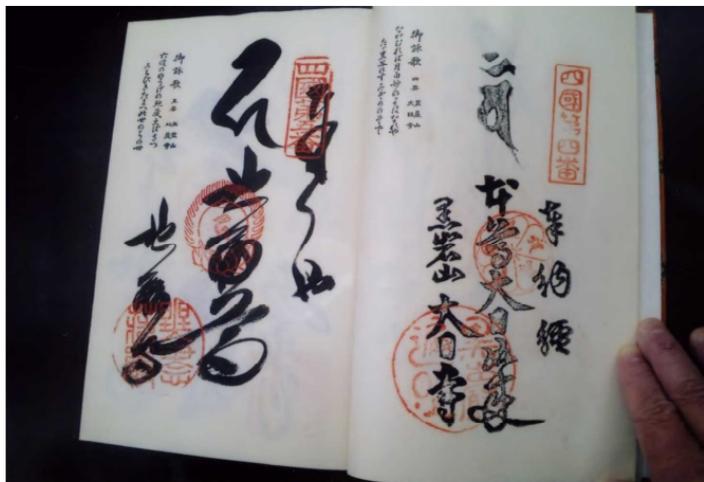
四番 大日寺 (だいにちじ)

四番 大日寺 (だいにちじ)

私が持つている納経帳は三冊ある。一度目、二度目の巡礼の際はそれぞれ新しい納経帳を購入したが、三度目の巡礼以降は重ね印用として一冊を今も尚、継続使用中なのだ。

一冊目は私の分、二冊目は妻の分として保管しておき、いずれ来るであろうお迎えの日にお棺に入れて貰う計画だ。三冊目は私が元気なうちに出来るだけ多くの巡礼を完遂したくて作ったものだが、取り敢えず二十五回を目標に頑張っている。まだ十六回目の巡礼を終わったばかりだ。

最初の二冊と三冊目にはたった一箇所だけ違う点がある。すなわち四番大日寺の朱印のページだ。納経書は墨書で二本尊を真ん中に、梵字と寺の名前が左右に書かれた上に三種の朱印を押捺するのが普通であるが、こ



こ大日寺だけは墨書部分が版木により印刷されているのである。つまり黒い判の上に赤い判を重ねる手法であつて、手書きで墨書するよりは遥かに能率よく完成する仕掛けなのだ。

お年を召した住職と思しき僧侶が大人の下駄ほどもある大きな木版を、これまた墨汁をたっぷりと滲み込ませた小さな座布団ほどもあるスタンブマットにドンドンと音を立てながら押し付けて一気に納経書を完成させたものである。かなり以前からの慣習とみえて知る人ぞ知るエピソードで、少なくとも数十年の歴史を刻んでいる事も、その版木の消耗度合いから容易に分かる。

しかし三冊目の納経は墨で書かれたものであつた。そう云えば納経所の位置も前は古い寺務所の一角にあつたが、今回は本堂を前にして新築された建物となつていた。

おそらく世代交代があつて若い住職に引き継がれたのではなからうか。そう云えばあちこち傷んでいた寺の建物や塀もすっかり綺麗になつて来た。

他寺との比較において圧倒的なインパクトを感じていた私は、幾ばくかの寂しさを禁じ得ないのだが、先代の老住職のことも気にかかるところだ。大きなゲタ判を力を入れてドンドンしていた光景が今となつては懐かしい。

南無大師返照金剛

五番 地藏寺（じぞうじ）

山門の前でいつも駄菓子を売っているオジサンがいる。昔懐かしいお菓子ばかりであるが残念ながら売れている気配はない。

私が気にかかるのはお店の採算なのだが、どっこいオジサン健康の為に店を張っているのか、それともそこそこ売り上げているのか知りたいところである。

地藏寺はその昔、源頼朝、義経をはじめ、蜂須賀家などの武将たちが多くの寄進をして、これらの寄進により寺領は拡大し、阿波、讃岐、伊予の三力国におよそ三百を数える末寺があったと聞いている。一番の霊山寺でさえ地藏寺の末寺であった。そうなの。

どうりでお寺の雰囲気はゆったりとしていて何事にも動じないお金持ちの雰囲気がある。例の駄菓子屋のオジサンも焦ったところが見受けられないのも理解できるのである。

南無大師遍照金剛

六番 安楽寺（あんらくじ）

山門を入れば右手に納経所・宿坊を、左手に池のある庭園を見ながら本堂までまっすぐの道が通じる境内だが何と言っても思い出に残るのは左手の池とその住民である鯉の話。

最初の巡礼には妻と次女・春奈が同行したが、次女が目ざとく見つけたのは例の池の中にある鯉の自動給餌装置だった。

この装置、本当に良く出来ていて決まった時間がくればカチツ・カチツ・カチツと音をたてながらペレット状の鯉の餌を池にばら撒くのである。見かけは灯籠の格好だが水面近くに開口部があって、餌はそこから勢いよく飛び出てくる仕掛けなのだ。

広い池なので鯉はアチコチに散らばって、ゆったりと泳いでいるのだがカチツ・カチツと音がするや、何処からともなく集まってきてエサが落ちるあたりは鯉で真っ黒になる。小さい鯉など大きな奴の下敷きになってエサにはなかなかありつけないで困惑している状態だ。誰が考案したのだろうか誠に興味深い機械であった。

ものの一分もしないうちに電源が切れるのかカチツ・カチツの音がしなくなる。そうすれば鯉も鯉で、エサが飛んで来ないので察知するや解散して四方に散って行

く按配だ。

本堂と大師堂を参拝しての帰り道、またもやカチツ・カチツと鳴り始めたが、やっぱり鯉達は先を争って集まって来る。梅干を見ると自然とツバキが出る条件反射と同じ理論であるうが、鯉もなかなか賢い。だてに鍋釜なしでは生きていない事に感動するのだった。

南無大師遍照金剛

七番 十楽寺 (じゅうらくじ)

春のお彼岸の頃だったか。

十楽寺の境内は小高い場所にある。大師堂のお参りを済ませ駐車場へのスロープを歩いてみると、すごい剣幕で黒塗りの軽自動車が見えた。その車の窓はスモーク処理され、暴走族の好きそうな漢字表現の金文字のステッカーまで貼ってある。

ほどなく車からはホンマモンのヤンキーと思しき若い女性が降り立ったが、あにはからんや二人の幼い子供連れだった。

小さな子供は二人とも女の子で、それぞれの小さな手には花がしっかりと握られていた。若いママは大きなヤカンを提げて三人が仲良く小路を登ってくる。行き先は十楽寺ではなく隣接する墓地だった。

プツと笑ってしまいそうな、それでいて何ともホツとするような光景であったが、私は自身を反省した。黒塗りの軽自動車・スモークガラス・金文字のステッカーとくれば簡単にヤンキーママだと想像してしまっただが、そのママが幼い子連れでの墓参りだったとは。

人を見かけで判断した自分自身を私は責め、反省もした。もしかすると本当に暴走族なのかも知れないが、子供を連れての墓参り、きつと将来はたくましい立派な

ママになるであろう彼女の後姿に思わず「南無大師遍照金剛」とつぶやいてエールを送る私であった。

南無大師遍照金剛

八番 熊谷寺（くまだにじ）

損害保険会社に勤務していた時代の話。

交通事故の被害者に対する損害賠償の交渉ほどデリケートなものはない。過失のある場合を除けば被害者はある日、突然に事故に逢い、痛みを耐え、精神的な苦痛を強いられるとあっては黙っていられないのも尤もである。

その被害者の気持ちになって、正確な損害を見極めたうえで円満な解決を図るのが損保会社の対人担当の仕事となるが、同じ人間同士のことは云え時として話し合いがこじれる場合もある。私も少々苦勞はしたものの、被害を受けた人が何を言いたいのか、何を賠償してもらいたいのか、はたまた適正な賠償は何なのかをすべての被害者に平等に接触することにより、うまく示談へと導くことが出来るようになるまでには精進した。

個別事案については個人情報垣根があるので披露することは許されないが、熊谷寺ゆかりの話は忘れることが出来ない思い出となった。

軽い接触事故で怪我をした男性の賠償交渉にあたっていたが、こともあろうに彼は事故後一ヶ月もしないある日、自宅の前にある畑に転落し亡くなってしまったのである。

死因は脳挫傷だった。事故による怪我とは部位も違い因果関係は無いものと判断

されたが、ご遺族の気持ちを考えてと簡単に判断するのは早計と、病院より資料を取り付け、会社の医療調査機関に持ち込んだが、やはり因果関係なしとの結論であった。

わずかばかりの賠償額で示談となったが、ご遺族からは最後までよく世話をし、貰ったと感謝された。

示談書に署名をもらい帰途について私だったが、途中にある熊谷寺に立ち寄り故人のご冥福を祈るべく般若心経を一遍、差し上げた。十五回目の巡礼の途中であったが既に八番さんは済ませていたので十六回目の巡礼の最初として納経させてもらった。

南無大師遍照金剛

九番 法輪寺（ほうりんじ）

門前に小さなお店があつて草餅が旨い。いつも買い求めるが一パック六個で一人遍路の私には多すぎる、女房への土産にと言いつけながら食べるのだが二個が限度となる。残りの四個は帰宅の後、仏壇へのお供えとなり、やがては家内と私の夕食後のデザートとなるのが通常だが、今回ばかりはちよつと違った。

駐車場まで来ると、木陰で一人の若者が弁当の握り飯をほうばっている。どうやら歩き遍路の風体だ。接待とばかりに「お餅食べるかい？」と二個差し出すと、嬉しそうな顔をして飛びついて来た。自分の白の納め札を差し出すあたり、作法に間違いもない。

歩き疲れた身には甘いものが余程ご馳走だったのか、見ている前でペロリと完食した若者は何とも云えない爽やかな顔をして、もう一度私に札を言うのだった。

当時四回目の巡礼で私の納め札は緑だったが、いばつてる様な気持ちになるのは嫌なのでお返しの納め札を彼には差し上げずに彼のこれからの永い遍路の無事を祈るだけとした。

南無大師遍照金剛

十番 切幡寺（きりはたじ）

一番から始まるお遍路も、ここ切幡さんで始めて階段の苦痛を味わう事になる。つまり九番までは概ね平地のお寺であるのに対し十番さんは山寺なので三百三十三段の階段が待っている訳である。正確に言えば山門より自動車道がついているのだが、専ら寺への物資の運搬とか、ご不自由な人のための側道とのこと、一般の巡礼者はこの道を使えばご利益がないということになる。だがしかし私は何時もこの道を車で登り、ズル出来ないものかと考えていた。そしてチャンスはやって来た。

九番法輪寺の参拝を済ませ、十番さんへ向かおうとしている私に声をかける美人二人連れがいた。切幡寺までの道が分からないので私の車にくっついて走りたいとのことだった。切幡寺の駐車場まで案内し、あとは階段をどうぞという事だが、二人連れと想っていたのは実は母娘でよく見ると母親は足が少々不自由な様子だ。とっさに「私の車でお寺まで直行しましょう」と提案し、三人は階段を登ることなく楽々境内へと到着したのだった。お為ごかしを地で行くような私だったが、とにかく私の夢も叶った。本当に楽チンだったのだ。

車中で母親が話すには三次市から今回は二回目の巡礼。一回目は十年前でご主人も一緒だったが、そのご主人が亡くなったのでお弔いを兼ねて娘と二度目の巡礼を

始めたとのことだった。一緒にお勤めしましょうと般若心経を詠んだが、お別れの時には何度も頭を下げてお礼を言って下さった。途中で買ったというブントンまで頂いた。

ズルしたことは良くないが、今回はお大師様も許して下さいるのではないだろうか。

南無大師遍照金剛

十一番 藤井寺（ふじいでら）

何とも不思議な光景だった。三度目の巡礼で藤井寺を訪ねた時の話である。

当日は爽やかな秋晴れの午後のこと、お参りを済ませて山門に向かう途中に、ふと見上げた空には秋雲がぼっかりと浮かんでいる。ようやく涼しくなり始め秋遍路もこれから賑わう季節へとなる頃であった。

ところが異変は空を見上げた直後から始まった。一切れの雲がムクムクと立ち上がった様に見えた途端、なんと手を合わせる仏様の後姿になって変化して行くのである。藤井寺のご本尊は薬師如来だが、まさにお薬師様が現れたのかと驚く程であった。

見とれる時間は一分もなく、徐々に形は崩れて元のちぎれ雲となってしまうが、何とも有難い光景だと思った。

南無大師遍照金剛

十二番 焼山寺（しょうさんじ）

四国八十八ヶ所巡礼の一日目はたいてい一番霊山寺から十二番焼山寺までを一気に済ませてしまうのが私のやり口である。少々きつい行程ではあるが十二番を打ち上げて帰路にある神山温泉で一風呂浴びるのが楽しみなので、無理を承知で実行する訳である。

もう五年も前になってしまった話だが、その神山温泉で面白いことになってしまった事があった。

その日も巡礼をすませ清々しい気持ちで温泉に到着した私であったが脱衣場で事件は起こった。一人の老人が脱衣カゴの前でもがき苦しんでいるのである。見ればセーターが首の周りに巻きついて脱げないで困っている様子だ。よく見れば右手がご不自由とみえてごちなくセーターをつかんで格闘しているのだった。

お四国参りを済ませたばかりの私にとって人助けはお大師様への忠誠を証明するもつけの幸いの機会である。「エイヤツ」と両袖をつかんで一気に脱がせてあげた。人助けをした充実感がじわじわ湧き上がってきたのも束の間、くだんのオジイチャン、機嫌の悪そうな顔をしておもむろに言った。

「ワイ いま服、着よったんじや！」

小さな親切が大きなお世話になった瞬間である。その後ブツブツ言いながらやり不自由な右手を操って、おじいさんはセーターを再度着るのであった。

南無大師遍照金剛

拙著「通り雨」より

十三番 大日寺（だいにちじ）

お遍路で般若心経を詠み始めてから間もなくの頃、確か六回目の巡礼の時と記憶しているが、お経の帳面を忘れて出かけてしまった事がある。

当然のことだが、その日の一番初めのお寺である大日寺の本堂で私は気がつくのであったが、その頃は般若心経を空で詠むまでには覚えていなかった。「マッといか」とばかりに本尊のご宝号だけを三度唱えるだけで済まさせて頂いた。

次の常楽寺の納経所で幸い教本を買って求めたので、その後の巡礼には差し障りは無かったものの結局、大日寺さんにだけは一回休みとなってしまった。

将来お迎えが来た時には「大日寺さんに一遍だけお経を差し上げるのを忘れていたので、もう少し猶予を頂けないか」と言い訳に使おうと思っている。

南無大師遍照金剛

十四番 常楽寺（じょうらくじ）

大日寺事件にあった通り、現在使用しているお経の本は、ここ常楽寺で求めた物である。確か五百円で買った。その後この教本には私の遍路にずっとお付き合いを頂いている。

長い間の使用で教本の各ページの右下は私の手垢が染み付き黒くなってしまっているが、既に十回は一緒にお四国を廻ったこの教本に私は格別の愛着を感じるのである。

これからも大切に使用させて頂くつもりだ。

南無大師遍照金剛

十五番 国分寺（こくぶんじ）

北海道に大学時代の先輩がいる。学生寮で一年上の先輩だから今もって絶対的階級差別が存在していて、私は何を云われても文句が言えない立場にある。

もうかれこれ十年も前の話だったが、弟さんが亡くなってお弔いのために四国八十八ヶ所を巡礼したいから資料を送れとの依頼があり、関係する書籍やら地図を送ったものの、その後の指示もなく忘れかかっていた平成二十年の春に「今年の冬から歩き遍路を始めるから宜しく頼む」と突然の命令が下った。

爾来、教職を退官するまでの五年間で三回の歩き遍路を彼は完遂したが、大変な功績である事は間違いない。弟さんの功德にもなったであろうが、本人にも人生の大きな区切りとなったことだろう。

「先輩！頭の後ろから何か光が差して来ましたよ。」と冷やかしたが、本人はマシザラでもない様子で「俺はブリキ大師だ」と臆面もなく云い始める始末である。

ブリキとは学生寮時代の彼のあだ名で当時、前歯が全部銀色の入れ歯であった事に由来する。そのブリキ大師様の遍路のサポートは徳島の私と丸亀のT氏に託されたが、ここ国分寺で彼の到着を待ちうけ、昼食に案内する事が徳島における私の最後の仕事となった訳である。

彼を国分寺で待ち受けるはずだったが、国分寺に着いてみると何と本堂の前に見慣れた黄色のカップ姿があるではないか。大きな声で般若心経を詠んでいる先輩だ

った。

昼食は近くの中華そば屋と決めていた私だったが、先輩もこの他、美味いといつて喜んでくれた。歩きで疲れた体には塩辛いラーメンとライスが一番なのだった。その後、三度の遍路の度に毎回このラーメン屋にはお世話になったが先輩に曰く、「北海道のラーメンに似た味だ。旨い」とのお墨付きまで貰った。店の名前は「十三八」トミヤさんと読むのだそうだ。

北海道の山、特に大雪山系の山々にご執心だった私は、ここ十年の間、先輩には大変お世話になっている。彼の家での宿泊はもちろん、山行にも同行してもらい安全な登山を何度もさせて頂いた。せめてものお返しのもりであるが安いお返しでもある。

南無大師遍照金剛

十六番 観音寺（かんのんじ）

ご住職のお母様と思しきが納経所にいた。ご朱印を頂いて納経料三百円を支払い
していると年老いた母親がポツリと問わず語りに云った。

「本堂が古くなって修繕で間に合わせてきたのだが、今度こそはダメで建替えな
ければならない・・・若いものに苦勞をかけることになって申し訳ない」と。

思わず千円札を一枚出して、本堂新築資金の寄進をさせてもらったが「ありがと
うございます」と老母は深々と頭を下げてくれるのであった。良いことをしたとい
う充足感に満たされ私も幸せだった。

南無大師遍照金剛

十七番 井戸寺 (いどじ)

私の納経帳も、もう十回目のお年寄りのお重ね印となり見た目にも真つ赤になって来たのを評して納経所のお年寄りが話しかけて下さった。

曰くには、「いろいろな所から沢山のお遍路さんが来てくれるので皆さんとお話をすることが一番の楽しみになっている、貴方も随分廻られているようだが、いろんな話があるのでしょね」

勿論いろいろな話があるのだが、いちいち話をするのも憚って「四季の移ろいを樂しむのみです」と答えた。本当は先を急いでいたので苦し紛れの言い訳を云ったのだが、後から随分と後悔した。折角の機会を頂いたにもかかわらず、自らチャンスを潰し、いたずらに遍路の先を急ごうとした。

もっと話し込んでいれば良かった。きつと良い想い出となっただろうに。

南無大師遍照金剛

十八番 恩山寺（おんざんじ）

私は小学校四年から六年まで、ここ恩山寺の近くにある小松島市坂野小学校で学んだ。そんなことから学校の遠足として何度か訪れた記憶がある。もちろん徒歩での遠足であったが、学校より三時間くらいはかかった様に思う。

木立に囲まれた納経所前の広場とか、寺務所に行くまでの坂の竹林などを良く覚えていたが当時のままである。弁当を平らげた後にワンパクどもが走り廻り、ワーワー云つてた声が今もかすかに聞こえる感じがする。竹林には立派なタケノコが生えていた。

もう半世紀以上も前の思い出だ。

南無大師遍照金剛

十九番 立江寺（たつえじ）

私が高校二年生の時、神戸にいた祖母を立江寺に案内したことがある。祖母はかねがね「立江さんにお参りしたい」と言っていたので、私は夏休みに神戸へ遊びに行った際に祖母を連れて徳島まで帰ってきたのだった。

祖母は非常に喜んでくれた。記念にお守りを求め、神戸へ持たせて帰ったまでは良かったのだが、後日そのお守りを紛失したとの知らせを受けた。祖母は随分ガツカリしていたそうだが、なくなつた物は仕方がない。可愛そうなので私は再度、立江寺を訪ね、何かいいものはないかと住職と思しき老人に尋ねると、半紙に何やらサラサラと墨で書いたものを頂いた。

今にして思えば納経帳に書く例の梵語まじりの書であつたのだが、おまけにとマールブルトコロレートの筒に寺の砂利を少々入れたものも祖母に送つてあげた。甲子園球児じやあるまいに境内の砂など祖母は希望していなかつたのかも知れないが、私ながら妙案だと確信したものだった。祖母はもちろん喜んでその後何年も法事がある度に親戚衆にふれまわつてくれた。生涯でただ一度のおばあちゃん孝行となつた。

南無大師遍照金剛

二十番 鶴林寺（かくりんじ）

悪い奴はいるもので鶴林寺の地元である勝浦町のある人が曰くには「つるりんじ」。本人の頭もツルリンなので洒落て言ったものだろうか。

まさか本気で漢字を読み間違えているのではなかろうかと弟がよく言っていた。弟はある銀行の勝浦支店に長く勤務していたから地元のジョークを側聞したものだろう。

その弟も平成十七年五十三歳で他界した。一緒に八十八ヶ所をお参りしようとしていたのだが、チャンスは永遠に失われた。

南無大師遍照金剛

二十一番 太龍寺（たいりゅうじ）

母が亡くなったのが平成五年の春。その年の夏、家内と次女を連れて太龍寺さんに参拝したが、太龍寺へはこれが始めてのお参りである。境内で妻と娘をベンチに座らせ記念写真を撮ったが、その時の話題は自然とお婆ちゃんの事となった。

母は生前、お四国遍路をしていたから、ここ太龍寺さんにもきつと来たはずだとか何とか想い出話を三人でしていた時、私は確かに何かを感じていた。

霊的な振動というか、ある波動が私の心の周波数と同調していて、母と一緒に居る様な、そんな感じと云ったほうが良かった。

後日、写真が出来上がってきて私は驚いた。オレンジ色の光が妻と娘と一緒に撮った一枚に映っていたのだった。あの時、感じた母のエネ



ルギーが光となって映ったのだろうか。

思えば四国遍路に出かけているのを知りながら、一緒に付き合おうかなどと考えたこともなかった。ましてや、どこかのお寺へ車に乗せて行ってやろうかなどと優しい言葉をかける事すら気づかないでいた。

私が四国遍路を始めたのは、その日から五年も経った平成九年。母が亡くなって七回忌を前にしてからだ。せめてもの母の弔いになればとの発想だった。

南無大師遍照金剛

二十二番 平等寺（びょうどうじ）

八十八ある札所の中で一番始めに訪ねたのは平等寺である。まだ私が三十二歳か三十三歳。銀行員時代で秘書課に勤務していた。頭取のお供で新野支店視察に随行し、支店長の案内で見学したのが、ここ平等寺なのだ。当時は八十八ヶ所など全く興味が無かった。

ただ自分が勤務する会社のトップとはいえ、周囲の人間がどうして是ほどまでに気配りをするのか不思議とも、何かヘンだとも思う私だった。

支店長室内のテーブルの上に、さりげなく、頭取が載っている経済雑誌が置かれていたの思い出す。「いつもこんな所には置いてはいないのに」などと意地悪く思ったりもした。もっとも私自身もただの茶坊主か腰きんちやく程度の仕事しか出来ていなかったので、他人を批評する資格など最初からない。

巡礼を思い立ち、本格的に八十八ヶ所を巡り始めるには是より十八年を要したが、宮仕えの要領もこの十八年間でミツチリと仕込まれた私であった。

南無大師遍照金剛

二十三番 薬王寺（やくおうじ）

「おめでとうございます」と元気な声が私の背中を押ししたのは、毎年正月の二日にお参りする日和佐薬王寺の山門に並ぶ露天商のオジサンであった。雑踏の中から私と家族を見つけ出し、店から飛び出して新年の挨拶である。心の底から清々しくなり、大変有り難い事だとも思った。

このオジサン、我が家の近所にある四所神社に夏・秋の祭りに金魚すくいの夜店をいつも出している御仁であり、私の金魚すくいの師匠である。ここ数年来、娘を連れてはオジサンの夜店に通い詰めるようになり、ついには目玉に泳がせている大きな金魚のすくい方を教示してくれた人でもある。

大きな金魚のすくい方にはちよつとしたコツが必要である。例のお菓子を針金で突き刺した道具は水に濡れるとすぐグニャグニャになり小さな金魚は別にして、目方のある大きな金魚はとても簡単にはすくえないのであるが、このオジサンにかかればいとも簡単に二匹も三匹もすくいとられるのである。

「頭の方からすくうんじや」「そんなに慌てたらアカン」「ソローっと近づいて次第に水を切つてやるとコテンと寝るんじや」との説明であるが、いざ実践となると非常に難しい。

「オッチャン、今日は成功するまで何回でもするで」と、ある夏祭りの夜、根性

を入れて頑張った結果、ついに七回目にしてゲット。一匹千四百円也の超高級金魚についてしまったが成功の喜びはひとしおであった。オッチャンも商売抜きで喜んでくれたものだ。

一度上手く行くと不思議なもので次第に自信がつき何度やっても成功するようになるまで長くは掛からなかった。娘も一緒にうまくなり最近では私の失敗を尻目に自分だけすくっては得意満面の場面も少なくなかない。お陰で我が家の玄關横にある小さな池には現在十五匹の真つ赤な大金魚が泳いでいる。もとより同じ夜店の水槽出身者であるから仲が良いのか徒党を組んでねり泳ぎ、先住民であった鯉は連れ合いと二匹で遠慮しながら同居させて貰っている様子である。

雑種は強いとは聞くがまさにその通りで寄生虫が発生した数年前の夏に二匹程死んだ以外は全員元気で、毎年大きく育っている。

祭りの都度「オッチャン今日も来たよ」「ようけすくてよ」がいつもの挨拶だが、葉王寺の門前で新年の挨拶を頂くととは思ってもよらなかった。しかも店を飛び出て来ての挨拶であり、最初はオジサンとは気づかなかったので咄嗟に「本年も宜しくお願ひします」と言うのが精一杯だった。聞けば金魚すくいの時期でもないのです、お面を担当していると言う。

「後で寄ってよ」「後から寄るわ」の約束通りお参りを終えて店に訪ねるとオジサン、かなり繁盛してよく売れている。「オッチャン来たで」と言うと「気に入っ

たヤツ持つてき」と言う。商売物を正月からタダ勘とは不謹慎なので代金を払う事にしたが、結局一つオマケしてくれた。ウルトラマンとドラエモン・・・両方とも娘が喜びそうもない面であったが私には嬉しかった。

タコ焼きと温かい缶のお茶に私の気持ちを託し「オッチャン、夏、金魚いくからね、これ食べとき」と渡したら、オッチャン「却って高いモンにしたなあ」と照れながら受け取ってくれた。その後ブラブラして帰途につく頃、もう一度オジサンの店の前を通ったが、オジサン、店のテントの裏でタコ焼きを美味しそうにパクついていた。

オジサン、いつまでも元気で頑張ってください。子供にのみならず、大人にまで夢を売る商売はとても立派です。

南無大師遍照金剛

拙著「あまやどり」より

高知県
二十四番
修行の道場
三十九番

二十四番 最御崎寺 (ほつみさきじ)

平成十七年に私の弟は一足も二足も早く、お大師様の元へと旅立った。その弟の車に乗せて貰って私はよく高知の朝市を冷やかしに行つたものだ。

高知からの帰り道を室戸回りにして食事をするのは何時も「ホテル明星」。

「ミヨウジョウ」ではなく「アケノホシ」とのことで空海がこの地に修行したことに由来しているらしい。その時は何も考えなかったが私が遍路を始める十年以上も前の話であるから無理もない。

「焼肉定食が旨い」と彼が言う。確かに旨かったし、ボリュームもあって大いに満足したが何処の何が旨いという話を彼はよく知っていた。

当時、私は車を持っていなかったので専ら彼の車の同乗者を決め込んでいた。高知往復ともなれば相当の時間を要したので、弟は「廃盤ベストコレクション」というカセットテープ八本組みを持ち込み、道中二人で聞きながらの旅である。青春時代に流行した歌謡曲の全集だった。

彼の車はスカイライン。その後、私は四国遍路を始めるのだが室戸の最御崎寺に近づくにつれ、いつも彼のことを思い出す。ホテル明星の駐車場には、あのスカイラインが停まっていはいないかと、そつと見るのだが居る訳はない。

「廃盤ベストコレクション」のカセットテープは今も私が大切に保管していて長距離ドライブの際には必携品となっている。

南無大師遍照金剛

二十五番 津照寺（しんしょうじ）

もう四十年も納経書きをしている事を自慢にしている御仁が納経所で頑張っている。一番さんの霊山寺で販売された納経帳の最後のページに「最初にお参りした寺にお礼参りを」と書いてあるのが、どうにも気に入らないらしい。

巡礼者の納経帳の裏表紙をめくって、霊山寺へのお礼参りの朱印を発見するや、まず十分から時には三十分もご高説に付き合わされることになる。曰くには「お礼参りは最初のお寺にするものではなく、弘法大師さまが眠る高野山・奥の院でなされるべきものである」

私も三回目の巡礼の際、三十分も彼にお付き合いを強いられたが一番さんのお礼参りをしなくなった途端、一言も文句を言われなくなつてスムーズにお参りが出来る様になつた。十二回目あるいは十三回目の巡礼の頃から、くだんのオジサンが居なくなつた。体調を崩されているのではと気にかかるところである。

南無大師遍照金剛

二十六番 金剛頂寺（こんごうちょうじ）

山門へと続く石段を登る度に考える。ここのお寺の石段は八十八ヶ寺中、一番の品質だと。まず、一段一段が大きく、立派な御影石である。しかも御紋まで入っている。

この手の石は一センチ太くなるだけで価額が随分、高くなると 大学時代一年後輩の名古屋で墓石を扱っているK君が言っていたのを思い出す。

そんな訳で、この寺の石段には相当なお金がかかっている筈だと考えながら登るのだが、大きな歩幅の階段には、さすがに一步一步が苦しくなる。男厄坂、女厄坂と二つあって有難さも、いや増す厄除けの石段なのだ。

上り口の駐車場には旧国鉄のマークが入った貨車を改造した売店兼喫茶店がある。ヘンコツ屋とかポンコツ屋とか楽しい看板がかかっていたが、コーヒーが美味しかった。

南無大師遍照金剛

二十七番 神峰寺（こうのみねじ）

本堂の右隅に、ご本尊とは別に二体の仏像が安置されている。旧日本軍がフィリピンに侵攻した際、レイテ島の攻防戦での多数の戦没者を弔うため現地で作された木仏を大阪在住の方が後年、日本に持ち帰り神峰寺に祀ったとのことである。

レイテ島の攻防は熾烈を極め、米軍の戦死者も多数に上ったとのことだが日本軍は結局隣のセブ島へ転進を余儀なくされ、元気な兵だけがセブに渡ることが出来た。あとは見殺しになりレイテの土となったのだそうだ。

私はセブ島にご縁があり、二〇〇二年から一年ほど、ある日本企業の現地法人に勤務したことがある。従ってフィリピンには格別の思い入れがあるのだが、さすがに戦争の痕跡までには考えが及ばず、巡礼の途中でようやく知り得た旧日本軍の悲しい話だった。

南無大師遍照金剛

二十八番 大日寺（だいにちじ）

納経所のカウンターの脇に、可愛い人形がある。高知では有名な女性の作と聞いたが作者のお名前は忘れてしまった。遍路姿の幼い女の子の人形だが和紙で出来ていて何とも愛くるしい。創作人形で有名な高橋まゆみさんの紙人形に似ていてホノボノとしていて尚かつ哀愁のこもった人形である。売り物かと尋ねると、もちろん非売品とのことだった。

その後、数年間は展示されていたがいつの間にかいなくなつた。もう一度会いたい。

南無大師遍照金剛

二十九番 国分寺（こくぶんじ）

妻と次女を連れての巡礼だったから二度目の巡礼の時の話である。

その日、妻は錦の納め札を発見。ご利益にあやかりたいと持ち帰るのだったが次女の様子がどうもおかしい。どうやら自分が見つけられなかった事が面白くないらしいのだ。

その日の最後にお参りしたのが、ここ国分寺だったが私が納札箱を覗くと、ある、ある。金の納め札が・・・

ここで私がお札があった。と騒げば次女の機嫌はもっと悪くなること必至である。少し見え隠れしている状態に金のお札を隠して知らぬ振りして、後から来た次女が覗くのを待っているとな案の定、大きな声をした。

「パパっ！きんのおふだがあつたよっ」

「おおそうか！春奈は金のお札を見つけたか」

あの時の得意満面な次女の顔は今もって忘れられない。それなりに気を遣うもの
南無大師遍照金剛
の楽しい幸せな巡礼だった。

三十番 善樂寺（ぜんらくじ）

痛い思い出がある。

高知巡りは私の場合、たいてい高知市で一泊し一日目は二十四番から三十番まで、二日目は三十一番から三十六番まで打って徳島市へと帰途につくのが習慣となつて、いるのだが高知での一泊は鯉のタタキで一杯つきとあつて、それなりに慰安旅行的な楽しみとなる。

その日も予定通り三十番、善樂寺にたどり着き、あとはホテルでくつろぐだけと、些か上滑りしていた私は納経所でひと悶着を起こすこととなる。つまり納経所のアルバイトと思しき姉ちゃんが、私の納経帳に重ねの朱印を押すにあたって、ポンポンと不規則極まりない位置に押すのである。それも毎回同じなのだ。

面白くないのは私である。どのお寺でも納経帳を大切に扱ってくれて朱印も規則正しく並ぶのである。従つて今、何回目の巡礼であるかすぐ判明できるものなのだが、ここ善樂寺さんのページだけは芸術的な並びなのだ。

よせばいいのに修行が足りなかったのか、つい口に出した言葉は「ねえちゃん！郵便局でも、もう少し丁寧にハンコを押してくれるよ！巡礼にとつては大切な納経帳なんだから綺麗に朱印を押してくれないか！」

しまった。と思ったがもう遅い。何ともいえない重苦しいムードが納経所に充満してしまった。

罰はすぐに当たった。翌日、三十五番清瀧寺に向かう途中に一時停止があったとかで、パトカーのお出ましとなり、罰金七千円を支払った。

その時の領収書はお守り代わりに今もって私の財布の中にある。余計なことを言わなければよかったと反省しても、もう遅い。

南無大師遍照金剛

三十一番 竹林寺（ちくりんじ）

小学五年生の時、修学旅行は高知一泊の旅だった。綺麗なお姉さんのバスガイドが五台山の謂れやら、山上の植物園の説明をしていたが、友人と騒いでばかりの私は何も聞いていなかったのか、さっぱり記憶が無い。

ただ、バスの駐車場から竹林寺へと続く参道のことにはよく覚えている。あの日は五月晴のもと楓の新緑がみずみずしく、木漏れ日が参道に水玉模様を作っていたのを思い出す。

当日には大相撲の千秋楽で、若乃花と栃錦の優勝決定戦があり、若乃花が連勝して優勝したのを宿舍で知り飛び上がって喜んだものだった。また、ペギー葉山の「南国土佐を後にして」も大流行していた。

四国巡礼を始めて竹林寺を訪れたのも五月だったが、新緑のトンネルの木漏れ日のあたる参道を歩いた時、四十五年も前の私がそこにいた。

南無大師遍照金剛

三十二番 禅師峰寺（ぜんじぶじ）

禅師峰寺は小高い山の上にある。駐車場からは細い坂道が本堂へとつながっているが、その途中に母娘のアイスクリン売りがいた。門前でのアイスクリン売りは珍しいことではない。次の種間寺（たねまじ）にもいるし、仏木寺（ぶつもくじ）、繁多寺（はんたじ）でも買い求めたことがあったが、母娘の売り子は珍しい。たいていはオッサン・オバチャンが一人で頑張っているものなのだ。

娘さんはまだ幼児。お母さんは当然ながら、うら若い人だった。「アイスクリンどうですか」の声に私が反射的に反応したことは言うまでも無い。何か事情があった親子でアイス売っているのかと詮索する私であったが可も無く不可も無い味だった。

その後の巡礼では見かける事がなかったが、二人の行く先を他人事ならず折りたいた衝動にかられる私であった。

南無大師遍照金剛

三十三番 雪蹊寺（せっけいじ）

「お父さん、お父さん 大変！大変！」
背後から妻に呼び止められた私は一瞬何か起こったのかと、たじろいだ。ただ妻が手にしている錦の納め札を見て、すべてを理解するのだった。妻は錦の札を発見したことが余程、嬉しかったのだろう。

納め札は巡礼の回数により色が決められている。三回目までは白、四回目からは緑、八回目からは赤、二十五回目からは銀、五十回目からは金、百回目からは錦という具合だ。

自動車で巡礼するのが普通となった現在では百回を越えて巡礼する人もかなり増えたと聞くが、それでもなかなかお目にかかれなのお札である。私もこの時初めて錦のお札を見る事が出来た。

ただ頂くだけでは失礼かと後日、お札の裏に表記されていたご住所・氏名にお礼状を出



したが、ご丁寧な返事と共に金のお札まで下さった。玄関に貼れば宜しいとのこと
で早速我が家の玄関の高い所におまつりさせて貰ったが、今も燦然と輝いている。
お正月には家内安全を願っていつも拜んでいる。

あの日のちよつと、はにかみながら喜ぶ妻の仕草は、若いころから少しも変わら
ない可愛さがあった。

南無大師遍照金剛

三十四番 種間寺（たねまじ）

ある日の種間寺の門前で、私は面白くなかった。先ほどから私の前に行くカップルがいて、しかもなにかとイチャイチャしていて神聖な境内で何事かと腹さえ立ってきたのである。しかもお勤めを終えた私が納経所まで帰って来ると、先ほどのイチャイチャカップルがまだ居るではないか。無視していると、こともあろうに先方から近づいて来て私に云った言葉が・・・

「あのう私達、水子の供養に来たのですが、どの様にすれば良いかを教えて下さい」
ただのカップルとばかり思っていたが、実は二人は夫婦だったのだ。しかも水子供養とは。

さつきまで持っていた私の偏見は瞬時に反省と自戒に変化するのであった。ここ種間寺は水子供養で有名なのは知っていたが、一体が五万円もする仏像を寄進した上で供養をして貰えることとなっている筈だ。そのことを教えて差し上げたが、咄嗟に「私は作法など知らないが、水子を供養するにはお二人の気持ちが大切なのであって、高価な仏像を寄進するのも良いが、この寺で拝むことこそ意義があるのでは」との話をした。

続けて、「一緒に般若心経を詠みましょう」と本堂まで引き返して三人で一遍を差し上げたのだが、二人連れは非常に喜んでくれた。もちろん私も何だか清清しく

なり、門前で二人に対して偏見を持った罪に少しだけ報いた気持ちになったものだ。

私の巡礼は俗に言う「スタンプラリー」の趣があり、早回りと滞在先での休息だけが楽しみの薄っぺらい巡礼と言われても仕方が無いのだが、今回のお参りで生まれて初めて他人の為に般若心経を詠ませてもらった。いつもは家内安全、夫婦円満、今晚の滞在先ではパチンコ勝てますように等々、自分のお願いばかりをする私のだが、目から鱗の感じであった。何とも云えない充足感に満たされた種間寺のお参りとなった。

南無大師遍照金剛

三十五番 清瀧寺（きよたきじ）

本堂前にコンクリート製の厄除け薬師如来立像があつて、高さは15メートルもある。立像の足元からは地下へ向かつて階段となり真つ暗なラセン階段の奥に、お薬師様が祀られていて、賽銭箱の横にお守り札が置かれている。

「身代わりお守り」と云われているが私は巡礼の度に前回に授かったお守りをお返しして、再びお参りに来る事が出来た感謝の気持ちを含めて新しいお守りを頂くことにしている。何時も財布に入れて持ち歩いているが、もう何度も私の身代わりになって災難から守って下さり、大変なご利益を授かっている筈だ。

しかし、確か十五回目の巡礼の時だったか清瀧寺を目前にして警察のパトカーにお世話になつてしまった事がある。

その日は妻と一緒にだったのだが、彼女が路側



に大きなへびを目ざとく見つけて騒ぐあまり、一旦停止の標識を見落としたのがいけなかった。

若いお巡りさんが「巡礼ご苦労様です」と言つて挨拶をしてくれるので「何でしようか」と返事をする。「実は・・・」となつた次第である。

罰金は7千円だった。大事故になる運命を反則金の支払いで身代わりさせてもらったと自分に言い聞かせ納得する私であった。その時の反則金の領収書は今も私の財布の中にしまつてある。勿論、お薬師様のお守り札と一緒だ。

南無大師遍照金剛

三十六番 青龍寺（しょうりゅうじ）

大相撲の元横綱・朝青龍は、この寺の名前に由来していると聞く。彼は高校野球でも有名な明德義塾の相撲部に所属していて練習に際し、ここ青龍寺の石段を毎日駆け上がったいたそう。歩いて登ってもシンドくて、真ん中あたりから勾配が急にきつくなる二枚腰のこの階段に、私はいつも息を切らせて本堂に辿り着くのである。

異国のモンゴルからやって来て、風俗・文化の違った日本で青年はどんな気持ちでトレーニングに励んだのであろうか。世の中には彼を悪役まがいに評価する輩もいるが、どうしてどうして大した人物である。

個人的には、あのスネタ様な仕草とかチョイ悪な風貌が好きである。大横綱だ。

南無大師遍照金剛

三十七番 岩本寺（いわもとじ）

一度、この宿坊にお世話になった事がある。お寺での宿泊はこの時が最初で最後だ。秋も深まりかかった寂しい夜、大きな部屋にポツンと私一人。テレビも無ければ調度品も何にも無い中で白い壁と、にらめっこ。

コンビニで買った弁当を食べ終われば全くする事もなく悶々とすること数時間。外出しても、この街ではと益々おっくうになる。

どうも修行がまだまだ足りぬと実感。その後、宿坊に泊まったことは一度もない。都市部のビジネスホテル専門で、外食の後はパチンコでもするのが唯一の楽しみでもある困った巡礼だ。何回、巡礼しても「これじゃ、だめじゃん」と云われそうだ。

南無大師遍照金剛

三十八番 金剛福寺（こんごうふくじ）

四万十川の辺にあるドライブインで休憩。ふと見たバス停の時刻表だが、あと十五分で足摺岬行きのバスが来る事になっているのを発見。たまにはバスも悪くはないのではと、やがて来たバスの乗客となる。

土佐清水までは、まずまずのペースだったがそこから乗り継いだバスは岬の海岸沿いをノロノロと走り、思わぬ時間を喰ってしまった。

だが問題は足摺岬に到着後に発覚した、いままがた乗って来たバスは僅か十二分の休憩の後、土佐清水へ折り返すとのこと。このままでは金剛福寺のお参りをしてると夕方までバスがない。咄嗟にバスの運転手に「急いでお参りを済ませ、必ず帰って来るから待っていてくれ」と懇願したうえでお寺まで走って行く私であった。

般若心経もソコソコに息を切らせて帰って来た私を彼はニコニコ顔で待ってくれていた。たしか二、三分は遅刻していた筈だったが、なあに土佐清水まではノロノロと一時間二十分はかかる道のり、運転手さんも慌てることはないのである。お客も途中の港町から乗車のオバアチャンと二人きり、同行二人の幸せなバス巡礼だった。

南無大師遍照金剛

三十九番 延光寺（えんこうじ）

私がよく遊ぶパチンコ台は魚とか甲殻類として亀など十種類の図柄のうち一つが三つ揃えば大当たりの「海物語」という優れものである。亀は大当たりすれば、もう一回おまけの当たりが約束される目出度い当たり図柄だ。

そして、ここ延光寺の境内にはその目出度い亀が鐘を背負っている彫像がある。今日の宿泊は宇和島であり、そこには何時も行くパチンコ屋が待っている。今夜のパワーを頂戴すべく姑息にも亀さんを拝もうとしていると背後から「アラー！お久しぶり」の女性の声。

三年前、十二番焼山寺で出会ったオバサン四人組だった。彼女たちはタクシーでの巡礼中であつたが山道の途中でタクシーがエン



コ。困っているのを見かねて取り敢えず私の車に乗せて焼山寺を参拝し、ふもとの温泉施設まで送り届けたご縁がある。

彼女たちは三年かかってようやく延光寺まで辿り着いたのだそうだが、その間、私は三回半巡礼をしていた事になる。当時のお礼やら思い出話やらで喧しいことこの上ない。最後は記念写真とかで美女四人の真ん中に納まる私であった。まんざら悪い気はしなかった。お別れの際に「また何処かでお会いしましょう」と声をかけたが、その後、彼女達との邂逅はないままだ。

境内で伊予柑を売っていたので一袋をプレゼントしてお別れしたがその後、慌てて例の亀さんまで戻り拝み直す私であった。お賽銭も張り込んで百円也！

・・・その夜のパチンコは大勝利・・・

南無大師遍照金剛

愛媛県
四十番
菩提の道場
六十五番

四十番 観自在寺 (かんじざいじ)

この寺には何時もドキドキ、ハラハラしながら十七時直前に駆け込むことが多い。早朝、徳島を出て足摺岬廻りで愛媛の御荘まで約四百キロの道のりだから仕方がないと言えば仕方がない。

そんな訳で、観自在寺の巡礼を済ませば、いつも疲れがドツと出る。宿泊は宇和島のビジネスホテルを常宿としているから、お参りの後まだ60キロの道程を残す。途中で温泉施設があるので風呂と食事を済ませて、やっと一息つけるが、あとはホテルの近所にあるパチンコ屋のみが目的地となる。リラックスしている為かよく勝たせてもらっている。こんな事でよいのかと少しばかり自省の念が無い訳ではない。

南無大師遍照金剛

四十一番 龍光寺（りゅうこうじ）

この寺で納経所を速く通過するには、ちよつとしたコツが必要である。

まず、住職が納経書きをしている時は絶対に話かけない事。一言、愛想のつもりで何か言葉をかけると、まず十分はお説教を受ける事となる。ひたすらに黙っている事が肝要なのである。

巡礼が多く並んで順番を待っている時などは何時もハラハラする。誰か一人は必ず余計なお喋りをしてしまうからだ。ある日など、広くもない納経所から人の列が伸びて本堂まで長くなつた日もあつた。そんな時、住職はというとチラリチラリと老眼鏡越しに列の長さを確認しては満足そうな顔をしているのである。ジレツタイこと、この上ないのだが腹まで立てたのでは、ご利益もパーになると思っているのか皆ジツと我慢する。

しかし初めての巡礼者などは、どうしてもご住職の、後光の差すお姿に、ついつい喋りかけては餌食となる。

「あんたら、どう見ても夫婦と、ちやうな」とか余計なことまで言つて喧嘩になつた事もあると聞いた。

有難い八十八ヶ所巡りをしていて喧嘩になつたのでは元も子もない。すべてはお大師様の御心と寛容に受け流すのが大切なことではなからうか。

一 この日、私は黙って列に並び、
一 発でクリアするのだった。
「お願いしますっ！」と一言だけ云って、見事に

南無大師遍照金剛

四十二番 仏木寺（ぶつもくじ）

幼い子供が二人、頰杖について寄り添っている可愛い石像が境内の中ほどにある。次女と彼女の友達で同じ年の女の子二人を連れてこの寺をお参りした時に、その石像の前で同じポーズを二人に取らせ写真を撮った。

年頃も良く似た石像の女の子と、その前で写真に納まる二人の対比が面白くて良い記念となっている。り今も我が家のアルバムの一隅でキラリと輝いている。

次女が小学四年生の時だから十歳くらいだったのだろうか。その彼女も十九歳となり今や何とも憎たらしい親不孝ものに育ったが、その時に既に私への親孝行は済ませていたのだろうか。確かに可愛く、一緒にいて私も幸せだった。

そんな或る日、「おじさんコンニチハ」と若



い娘さん、それもベッピンさんが私に声をかけてくれた。ニコニコと挨拶をしてくれたのは、あの時次女と一緒に写真を撮った娘さんだった。「エライ違いや」と思わずつぶやく私であった。よその子供は本当に成長が早い。そしてまた可愛く見える。だから私は未だに次女から邪険にされるのだろうか。

南無大師遍照金剛

四十三番 明石寺（めいせきじ）

ここ明石寺は何とも落ち着きのある環境の中にある。山懐の高台まで大きな階段を登れば右手に納経所が現れる。本堂はもう少し上にあるが苔蒸した杉の太木の間を抜ける時はひんやりとした荘厳な空気を感じて、誠に有難い。

しかし私にとって興味深いのは、その賽銭箱の事である。とにかくデカイ。八ヶ岳寺の中で最大の賽銭箱で畳一枚ほどの大きさは十分にある。しかもかなりの年物と見えて投入口の木製の格子が、長年に亘る硬貨との衝突によってササクレだっているのだ。

また、この賽銭箱の本体は床下に収納されていて、投入口だけが畳敷きの床の上に露出している状態である。

お賽銭を投げると、カタン・コロコロと入り口の格子に当たる音がするが、その後、しばらく経ってからチャリンと聞こえるところから、かなりの容積がありそうだ。

どれ程のお金が貯まっているかなどとは下衆の勘ぐりというものだ。罰当たりな事を考えてはいけませんが、やはり気になる明石寺の賽銭箱であった。

南無大師遍照金剛

四十四番 大宝寺（だいほうじ）

山の中腹にある当山の駐車場は麓にある。駐車場の先にも路が伸びているのだが関係者以外の乗り入れを遠慮して欲しい旨の立て札がある。しかしこの道は納経所のすぐ傍までついているので便利な事この上ない。参道を歩けば立派な山門もあり見学に値するし、その分ご利益も弥増す訳であるが一箇寺くらい許してもらえないのではと勝手に思い込み、私は側道をいつも利用させてもらっている。狭い道なので途中の曲がりきれないカーブなど何回も切り返しながら通過し、上の駐車場まで行くがリスクと引き換えにする安楽さも、なかなかのものなのである。

十番さんでも似たような事をした私であるが、ズルをする考えはそろそろ止めよう。何時とも思いつながら今回も納経所まで車で乗り付ける私であった。

南無大師遍照金剛

四十五番 岩屋寺 (いわやじ)

九十五回目の納め札の主を納経所にて発見。どれ程のオーラのある人かと思いきや、ただのオバサンだ。もうすぐ百回目と少々自慢げに話をしていた。

納経帳を見ると朱印で真つ赤になっていて、一体何回目の朱印かも分からない状態になっている。私も重ね判を十三回目の納経帳を持っているが、彼女のそれと比べればまだまだ白い部分があつてカワイイものだ。

納経所に並んで自分の順番を待つ間、ふと考えた。いったい巡礼の回数とは如何ほどの価値を持っているのだろうか。

自動車を利用して巡拝するのが標準となつている現在は、歩き遍路の手段しかなかった時代と一回の巡礼の重みは自ずと違つてくる。しかし歩き遍路は自動車遍路の何倍の価値があるのかという定義もない。要するに遍路の回数は巡礼者にとってその軽重を図るものではないという事ではなからうか。

貧者の一灯の謂れもあるが、いたずらに巡礼回数だけではご利益に差が出来る筈が無い。もうすぐ百回目を自慢する件のオバサンを見ながら、私は自分の姿がここにある様な錯覚にとらわれるのであつた。

お金と時間、そして何よりも健康に恵まれてこそ巡礼も出来るのである。その環

境にある事を感謝することが肝要であつて巡礼の回数を自慢するなどのもつての他ではないだろうか。いたく反省した岩屋寺であつた。

南無大師遍照金剛

四十六番 浄瑠璃寺（じょうるりじ）

納経所にいらつしやる、ご住職と思しき方に感激。とにかく気高くて崇高な雰囲気を持つひとなのだ。

もの静に構えていて、それでいて威張った所がない。とかく有りがちな説教っぽくもないのに何かを語りかけてくる様な迫力を持っている人だった。

朱印を押したあと、「ご苦労様でした」とか「お気をつけてお巡り下さい」と云って下さるのだが、何だか後光が差している様に見えるに誠にもったいなく感じる次第である。

きつと立派な方に違いない。どこかのお寺と大違いだ。

南無大師遍照金剛

四十七番 八坂寺（やさかじ）

ご本堂はコンクリートで出来ているためか、とにかくお経が上手く聞こえる。風呂で歌えば下手な鼻歌も反響して上手く聞こえるのと同じ原理だろう。何処でも良い訳でもなく、何かの工夫がされているのか、ご本尊の阿弥陀如来さんの前が一番よい。

そもそも八坂寺は文武天皇の勅願により伊予の国司、越智玉興公が八ヶ所の坂道を切り開いて創建したことから寺名となったそうだが、ますます栄える「いやさか」にも出来るとのこと。

今日もご本尊の前で、我が身・我が家族の「いやさか」を願いながら般若心経を差し上げる私だったが、自分の詠む般若心経にうっとりするのであった。

南無大師遍照金剛

四十八番 西林寺（さいりんじ）

納経所にて朱印を貰っていると、脇の壁に四十八番と五十一番の道案内の張り紙を見つけた。ポスターの提供者なのか右下の余白部分に「鷹ノ子温泉」と印刷されているのだが小さな紙が貼り足してあって「営業は現在休止中」とある。

鷹ノ子温泉は道後温泉とは兄弟分の温泉であって、とりわけ地元の人には人気の温泉である。泉質も道後と同じらしい。私も何回か利用をさせてもらったが庶民的な雰囲気です。リラックス出来る「いい湯だな・アハハン」なのだ。

だが、その鷹ノ子温泉が営業を休止とは・・・改装工事が修理などで一時的に休業しているのなら良いのだが昨今の景気情勢からみて立ち行かなくなったのではとも心配する。

例のポスターの右下部分に「営業再開」の紙が張り足されることを願ってやまない。

南無大師遍照金剛

四十九番 浄土寺（じょうどじ）

山門右側の仁王様には目が無い。その昔、寺が賭場であったと聞くが、常連の一人の博徒が一向に目が出ないのに腹を立てた挙句、仁王様の目を持ち去ったという話が残っている。事の真偽は不明であるが誠に罰当たりな話である。しかしこの仁王様、目が無いことで返って迫力がある。何が幸いするか分からない。

そして又、納経所の玄関には大きな睡蓮鉢がある。中には大きな金魚が沢山いる。いつも手入れが行き届いていてブクブクと泡が出る機械があるため水草も魚も良く育っていて青々とした水草の間を、少々育ち過ぎのオデブ金魚が大きなお腹をユサユサさせて泳いでいる。誠に平和な小宇宙だ。曼荼羅図の一部を見る思いもする。



近年、仁王様は改修されたが目も復元されて立派になった。平成二十年十一月に参拝の際、確認したものである。

南無大師遍照金剛

五十番 繁多寺 (はんたじ)

最初にこの寺を訪れたのは平成七年六月十四日と記録がある。妻と次女の三人連れでの巡礼であった。繁多寺の境内には藤棚があつて今を盛りと綺麗な藤の花が咲き揃つていたのを思い出す。

ちようどお昼なので藤棚の下のベンチで弁当を広げ、家族揃つての楽しい昼食をとつた。次女は当時、小学二年生のオチビさん、この原稿を記している現在は二十歳となる。

思えば時の経つのは早いものだ。藤の花が綺麗だと言って彼女が夢中になつてはしゃいでいたあの時を、映画のワンシーンの様に今も鮮明に思い出すことが出来る。

南無大師遍照金剛

五十一番 石手寺 (いしてじ)

大師堂の中に、古びているが非常に豪華なソファセットが並んでいる。どう見ても高級クラブかキャバレー等、夜の世界の備品と思われるし、デザインもその世界独特の雰囲気が漂っている代物である。

そういえば道後には昔、キャバレーがあつた。四国では一番大きな規模を誇つていて私が銀行員の駆け出し時代に慰安旅行で道後温泉を訪れた時、先輩に連れられて恐る恐る入った記憶がある。

美人のホステスがたくさん寄つて来て「この子カワイイッ」ってな乗りで随分と可愛がってもらつたものだ。その時のソファがどうも大師堂のソファと同じに思えてならない。

キャバレーの時代も遠い昔のこと。今や店もなく又、何処にあつたかも分からないがどっこい、ソファだけが第二のお勤めを大師堂の中に得ているのかも知れない。今日もお年寄りが数人、座り込んで疲れを癒しているのだが、埃っぽくて少々汚れているものの現役時代にも増して輝いているようにも感じる私だった。

南無大師遍照金剛

五十二番 太山寺（たいさんじ）

山門に住み着いているのがノラ君と思しき犬数頭とハチの集団。ワンちゃんは時に山門に繋がれていて、もの悲しい顔をしているものオリコウにしている。純粋なノラ公と違ってガツガツしていないところが、さすがに名刹の住民たる所以であろうか。

お遍路さんからオヤツを貰って食べるには不自由がないらしく丸々と太っている。もう一つの住民がハチの大群だが、山門の根っこに巣があるらしく寒い時期以外は何時でもブンブンと飛び回っている。刺されはしないかと心配だが、これまた人的被害は無い模様だ。さすがに名刹の住民たる貫禄か、犬と同じくガツガツしていない。

南無大師遍照金剛

五十三番 円明寺（えんみょうじ）

虎の絵の大きな屏風が納経所にあつた。かなり傷んでいてアチコチ破れていたが、もしかしてテレビの「お宝鑑定団」ものかも知れないと思う私であつた。

しかし二〇〇六年に訪ねた際には、納経所が新築されていた。屏風のことを尋ねると処分されたとか。もつたいない、大変な宝物だったかも知れないのに。

札所はどんどん新築されて行く、たいへん結構なことなのだが古き良き時代の保存にも少し気を遣つて欲しいと思うのは私だけだろうか。

それにしてもあの虎の屏風・・・気になるところである。

南無大師遍照金剛

五十四番 延命寺（えんめいじ）

納経所の窓口でユーモラスな漫画が貼ってあり吹き出しに曰くには「お参りが先ですぞ」とある。参拝の作法として本堂、大師堂にお経を差し上げた後で納経所に立ち寄りご朱印を頂くことは巡礼なら誰でも知っているのだが、現実には札所に到着するや真っ先に駆けつけるのが納経所である。団体巡礼に巻き込まれて長時間待たされるハメになるのを避ける為の姑息な発想ではあるが、私も第一回の巡礼からこの悪習慣を改める気はない。

ところが、「お参りが先ですぞ」の張り紙は私の十回目の巡礼の頃から無くなった。もともとは絵心のある納経書きの人がいて、この絵を描いたのだそうだが、その人が退職した後、絵の方も無くなったのだそうだ。もったいない事だと思っ



福田赳夫によく似た少し頑固そうで、顔の横の黒いシミがポツポツとあるオジイサンの絵だったが今更ながらに懐かしい。

その後、元総理の 菅直人 氏が数度に分けて四国遍路を歩きで完遂した際、三度目の始めのお寺を、ここ延命寺から始めたそうであったが、その年には総理の座を譲り、延命はならなかったとの話も残っている。

南無大師遍照金剛

五十五番 南光坊（なんこうぼう）

平成二十四年十二月に巡拝の際、納経所に居られる平田様にたいへんお世話になったがその後、出状した、お礼状のコピーである。

拝啓

私は昨年十二月に巡礼のみぎり、南光坊様を参拝させて頂きました。年明けには歩き遍路をしております私の学生時代の先輩が南光坊様にお参りが出来そうだったものですから、彼にせめてものお接待をしたいので気持ちばかりのお金を預かって欲しい旨、納経所窓口で貴方様にお問い合わせした者でございます。

後日、遍路を終えた先輩から平田様のご親切な案内が納経所の窓口に掲示されていて感激したとの事でした。伺いますと平田様のご勤務が終わる直前にお参りを済ますことが出来たので直接、平田様とお話が出来たようですが、思いつきの私の気持ち左様にも大切に伝えて下さいました事、改めてお礼申し上げます。

私事ですが小生もお四国に度々出かけます。八十八のそれぞれのお寺でさまざまなエピソードがありますが、南光坊様での貴重なエピソードとなりました。

実は「四国八十八ヶ所・雑感」なるエッセイに挑戦中として今回のお話は勿論、貴坊の話として書かせていただくつもりです。あと何年かかるかも分かりませんが完成の際には平田様にもお届けしたいものです。すでに二つのエッセイ集を発行し

ましたのでCD版を勝手ですが同封させて頂きます。四国遍路にまつわる話が少々出ておりますのでご笑読下さい。いささか批判めいた罰当たりな表現もありますが寛大なお心でお許し下さい。このたびは大変有難うございました。

春遍路たけなわの候、平田様のご健勝をお祈り申し上げます。 敬具

ご参考

「あまやどり」

（托鉢の三者三様）ほか

「通り雨」

（お参りが先ですぞ）ほか

五十六番 泰山寺（たいさんじ）

泰山寺は立派な石垣の上にある。そしてこれまた立派な石段を登ると本堂に着く。その石段の登り口に時々見かけるのが托鉢の僧と思しきオジサン。

このオジサン白衣に身をつつんで、それらしくお椀を持って起立しているものだから私はついつい浄財したくなる。しかし或る日「持てヨッ」と思った。石段の脇には何とスーパークラブが停まっているではないか。「ハハン これ通勤しているんだ」。

土曜・日曜なら参拝者も多からうが平日はそれ程でもない筈だ、まして雨の日、寒い日、はたまた暑い日を考えれば割に合う商売とは思えないのでご苦労に免じて百円硬貨をお椀に入れる私であった。似たようなスーパークラブ通勤の托鉢は六十七番大興寺でも見た。

南無大師遍照金剛

五十七番 栄福寺（えいふくじ）

私の好きなお寺の一つである。広くない敷地に本堂と大師堂が小ぢんまりと納まって、なお且つ風格もあるのだが、団体のお遍路さんと鉢合わせた時などは隅のほうで小さくなって般若心経を詠まなければならぬ不便さもある。

境内まで車を乗り入れられるのも有難いが、駐車料金は二百円である。ただし寺の下にある民間の駐車場は三百円也、知らない人、或いは始めての人はたいてい下の駐車場を利用してはなからうか。

経験にものを言わせて百円を節約する私だが「こんな事で喜んでいても良いのだろうか」と何時も反省する。

南無大師遍照金剛

五十八番 仙遊寺（せんゆうじ）

境内の大きな楠木に子供が遊べるようにと、太い枝に結ばれた縄がある。ご丁寧に手で握り易いようにとコブまで作ってくれている優れものの遊具だ。

次女と一緒に遍路をした際、無邪気にターザンのようにぶら下がって遊んでいた頃は小学4年か5年生だったろうか。ところが平成二十年十一月二日に訪ねた時には例の縄は無くなっていた。朽ち果てて危険になった為に取り除かれたのか、とにかく無くなった。

秋の進む静かな境内のベンチで休んでいると彼女の当時の笑い声が聞こえる感じがした。小春日和の穏やかな昼下がりがりだった。

南無大師遍照金剛

五十九番 国分寺（こくぶんじ）

「お接待、させてください」とお兄ちゃんが小さなハンドタオルを持って、門前のタオル屋さんから走って出てくる。今治は全国に知られるタオルの産地、家業のタオルの販売促進も兼ねて製品であるタオルを遍路さんに一枚ずつ進呈しているのであろう。

大変ありがたいのであるが、お参りを済ませたの帰り道には彼の店に入って、タオルの一枚も買わなければというプレッシャーにも悩まされる。

そのうち気兼ねもあつて接待のタオルを辞退させてもらっていたが、数年もしない内に今度はお店そのものが無くなってしまった。業界が苦しいのは理解していたが、身近な問題として現実味があつて、お店を閉めざるを得なかった彼のタオル屋さんのことを思えば悲しくもなる。今にして考えれば、当時のあのお兄ちゃんも必死だったのだろう。

南無大師遍照金剛

六十番 横峰寺（よこみねじ）

平成十八年七月八日、雨が降っていた。麓から横峰さんまでの山道は十キロ位の細い私道を利用するが、対向車の来ない事を祈りながら三十分ほどの運転はかなりシンドイ。乗合のマイクロバスも出ているが運賃は千七百円也。マイカーの道路使用料が千八百円なので百円安く、また自身が運転することなくお寺に安全に到着できる。「たまにはいいか」とマイカーを乗り捨て、バスのお世話になり、運転手のすぐ左の特等席に陣取り横峰寺までの参道を高みの見物と決め込む私であった。

乗り合わせたのは婦人ばかり（バアサンばかり）の団体巡礼の一行。賑やかな事この上ないのだが、ついでに乗せて貰っているのは私の方なので文句をいう筋合いはない。

横峰さんの参拝を済ませ、バスまで戻ると運転手さんが暇そうに待っていた。問わず語りに彼と話が始まったのだが、彼は以前、三島・松山間の高速道路建設に携わりダンプの運転手をしていたとのこと。馬力のあるダンプと違ってマイクロバスで山を登るのはシンドイと云う。時々人を乗せている事を忘れてキワドイ運転も強いられるとのこと、仲間は、心配して忠告してくれるのだそうだ。

だが彼には運転の腕に自信があつて、タイヤ半分を道の外に出しながら山道を登ることなど簡単とのこと。黙って聞いている私は背中が冷たくなるのを感じたが彼の日に焼けた精悍な顔つきをみて安心もするのだった。実にカッコ良かった。

南無大師遍照金剛

六十一番 香園寺（こうおんじ）

お参りが先ですぞ

「あんた！納経はお参りの後じゃと言うただろ。先にお参りっ！お参りっ！」シツシツと云わんばかりの劍幕で寺の職員に諭され私は困惑した。六十一番香園寺の納経所での出来事である。「さつきから見とったんぞ！」とダメまで詰められた。友人を案内しての参拝だったので私の面目は丸つぶれとなり、僅かばかり残っている自尊心も傷つき、次第に腹さえ立って来た。

四国遍路は云うに及ばず、「納経はお参りの後」とは作法として決まっている。私も勿論承知しているのだが、実際に巡礼をしてみると札所に着くやいなや真つ先に納経所を訪ねてしまうのが習慣となっている。

理由は簡単、待ち時間の節約にある。納経所の多くは窓口が一つか二つのため、団体の巡礼バスとかち合った場合、何十人分もの納経帳、掛け軸、白衣の山と遭遇するからだ。

お参りを済ませているうちに巡礼バスが到着しようものなら、二十分ほども待たされるハメになった事が何度もある。姑息とは知りつつもどうしても納経所にまず足が向いてしまうのである。私だけなら大いに反省もすべきだが大抵の巡礼者も同

じ行動をとっているのではなからうか。

バチアタリな行動との批判やお叱りは甘んじて受ける覚悟は出来ているが、そこは我らがお大師様のこと、寛大な御心できつとお許し頂けるのではと密かに期待しつつ一回目の遍路からずっと無礼を働いてきた私だが都合十六回目の遍路の途中で終に罰があたった。

その日は朝から天気が下り坂、直前にお参りした六十番横峰寺では霧で五メートル先が見えない程の山道を恐る恐る運転を強いられた私だった。幸い友人が同行していたので怖くはなかったが一人では、きつと中止していたかも知れない。そして、やっと着いた六十一番、香園寺でその事件は起こったのである。

既に細かい雨が降り始めていたが私は何時ものとおりに一目散に納経所へと急いだ。駐車場には団体巡礼と思しきバスが停まっていたが果たして納経所の片方の窓口では納経帳の山と格闘している婦人がいて、もう一つの窓口が個人巡礼のために例のオジサンが頑張っていた。

「お参りを済ませてから納経して下さい」と彼がつぶやいているのを微かに聞いた感じがしたものの先を急ぎたい私の耳には右から左へすり抜けるには十分な程の忠告でもあった。

だがしかし、どこの世界にも根性の座った御仁はいるもの、結果は冒頭のやり取りとなった次第。

悪いのは勿論、私であつて何の申し開きも出来ないのも理解出来るが、今回ばかりはどうにも合点が行かない。要するにケタクソが悪い（阿波弁）のである。

こんな時、お大師様も同じように叱責するのであるか。だったらツアーコンダクターが先に納経を済ます大勢の団体巡礼者にも等しく対応して頂きたいものだ。

納経の文字からしてもお経を詠んだ後の証として朱印を頂くのが本来の作法であるがスタンプラリーと揶揄されながらの我輩の巡礼は最初から否定されなくてはならないのであろうか。既に過去十五回の巡礼中に頂いた重ね印で私の納経帳は真っ赤になっているが、すべて無効なのか。

四国遍路をする人にはいろんな人がある。心に病を持った人。身体に病を持った人、あるいはその両方を持った人。善人ばかりか少々悪い事をして来た人も含まれる筈。しかしお大師様は分け隔てなく迎えて下さるのではなからうか。

ご指導下さる様子が暖かく伝わってくるような雰囲気ならともかく、頭ごなしの叱責とは如何なものか。お大師様の本当のお気持ちなのか。

等々、瞬間的に私の頭の中で沢山の葛藤が渦を巻いた。

お大師様が私を試されているのではと感じた私は、喉元まで出掛かっていた言葉を飲み込んでご本尊の大日如来様にお経を差し上げに向かったが、帰りには件の納経所には立ち寄りせず朱印も貰わずにお寺を後にするのだった。せめてもの抵抗のつもりだった。

いつかお迎えがやって来た時には、「六十番さんの朱印が一回だけ足りないのもう少し猶予をお願いします」と言い訳にさせて貰うつもりだ。

今治の延命寺の納経所では十年ほど前まで半紙に描かれた住職の似顔絵の漫画が貼ってあって、吹き出しに曰く「お参りが先ですぞ」とあったのを思い出す。

ユーモアたっぷりで思わず「なるほど」と反省もしたものだ。残念ながら反省ばかりでその後の改心が伴わなかったため、今回の臍を咬んだのであろう、返すがえすも残念だ。

しかしお大師様なら「今回はよろしい。次回からはお参りが先ですぞ」と言ってあの時許して欲しかったと考える私は、まだまだ修行が足りないのであらうか。

南無大師遍照金剛

拙著「通り雨」より

平成二十四年四月 著

他人は自分の鑑

六十一番、香園寺事件より一週間が経った。最初は憤懣やるかたなく、妻やら友人やらに言いふらしていたものの、自然と気持ちが悪く落ち着くにつれ、自分の落ち度を棚に上げ他人ばかりが悪いのだと一方的に決めてかかる事に反省の念が沸き上がってくる最近の私である。

交通違反切符を切られた者が、運が悪かった。皆やってるのに何故自分だけが罰金を払わされるハメに・・・と悔やむが、今回の私の納経帳騒動もこれに似ているのではなからうか。原則的に非を認めざるを得ないにも拘わらず、屁理屈をつけて何とか自分を正当化、或いは美化するのはみつともない事だと感じ始める私だった。

他人は自分の鑑という話を聞いたことがある。今回の事件に照らしてみれば、納経所の男性の叱責に思わず抵抗を試みた私であった事は間違いない。しかし彼の仕草が攻撃的に感じたのは私自身が彼にも挑戦的であった証でもある。

内心「この人は自分を弘法大師の分身とでも勘違いして舞い上がっているのでは・・・」とさえ思ったのも事実である。が、しかし同時に私自身も「遍路は十六回目であるからルールは当然知っている。お大師さんなら寛容に許して下さる筈だ・

・」と勝手な言い訳を考えていた。その様な態度が自然と私よりオーラとして出ていたため例の納経所の職員に見透かされ、横柄な奴だと思われたのではなからうか。

お大師様は私に教えて下さった。自分が怒れば他人もまた怒る。自分が笑えば他人もまた笑う。もとよりお大師様と二人連れ、遍路そのものが不愉快になるわけが無い。不愉快なものと感じたのは全く私の不徳の致すところ、他人は自分の鑑なのだ。これからの納経は、キチンとお参りを済ませてからに致します。有難うございました。

この事件の悔やみを聞いて下さった先輩から一句を授かった。曰くには・・

お参りが 先と言われし 春遍路

春は遍路の多い季節。自然と境内も混雑し、納経所の職員も対応に忙しい。一方、遍路も少しでも早く、より多くのお寺をお参りしたい。そんな中での人間の煩惱がチヨツピリ覗いた出来事であった。

色即是空 空即是色

拙著「通り雨」

平成二十四年四月 著

六十二番 宝寿寺（ほうじゅじ）

六十番横峰寺のあとには、いつも逆打ちとなる。つまり六十四番前神寺から六十一番香園寺の順に参拝するのである。

理由はこれら四ヶ寺が国道十一号線上を西から東へと並んでいるからだ。徳島から松山へ向けて西進する私にとって六十番横峰寺が一番近いものだから、その後のお寺は逆向きに並んでいる。従って前神寺から香園寺はいつも逆打ちさせてもらっている訳だ。

何も逆打ちが悪い訳でもないのだが、このコースで一番苦痛なのが昼食のタイミングである。横峰寺を降りてくると大抵は昼過ぎとなっている。もちろん何処でも昼食は取れるのだが私が甚く気に入っているラーメン屋が宝寿寺の西にあるものだから、いつも我慢して宝寿寺までのお勤めを済ませることとなる。時には午後一時を回ることもあるので糖尿病の私にとってはたまらない空腹感との戦いとなる。従って宝寿寺でのエピソードなど全く無く、ただひたすらに般若心経を詠み、そそくさと納経印を貰い一目散にラーメン屋を目指すのである。

五十歳より発症した糖尿病だが、自己管理の甘さからか平成二十一年十一月に心筋梗塞を引き起こすに至り、ついにインシュリンの投与と厳しい食事制限を課せら

れた現在では、ラーメンを食べたさにこの様な我慢をしてはならないのだが宝寿寺
さんをゆつくりとお参りせよとの、お大師様のご指導のように感じられる今日この
頃でもある。

南無大師遍照金剛

六十三番 吉祥寺 (きちじょうじ)

ご本尊は毘沙門天さんで、ご真言が難しい。「おん へいしらまんだや そわか」
八十八ヶ所の札所の中で次の四ヶ寺だけが固有のご本尊をまつている。いずれ
もご真言の読み方が難しい。

三十一番 竹林寺 文殊菩薩 「おん あらはしやのう」

五十五番 南光坊 大通智勝仏 「おんまか びじやにやじやにやのうびいぶう

そわか」

七十番 本山寺 馬頭観音 「おんあみりと うどはん ばうんばった」

そして、ここ六十三番吉祥寺である。

八十八ヶ寺のご本尊の中で一番多いのは薬師如来の二十三ヶ寺、次は千手観音と
十一面観音が十二ヶ寺で並んでいて、この三つのご本尊で過半数の四十七ヶ寺を占
めている。

私の子供の頃、熱を出してシンドイ時に何時もオバアチャンが手をかざして云つ
た言葉が「おん ころころ せんだりまとうぎ そわか」 薬師如来様のご真言だ
ったのだ。

六十四番 前神寺（まえがみじ）

一回目の巡礼で前神寺を訪れたのは妻と次女の三人連れだった。平成九年六月十五日と私の手帳には記録されている。

この日は松山から今治を経て最後の巡拝が、ここ前神寺となり、お参りを済ませば徳島までひとつ走りとなる為、少し休息を取ろうとベンチで一眠りした。十分後には目が覚めるのだが、これほど完全な睡眠はないと思うほどの何とも云えない安らぎを貰った。雲の中でフワフワと、でもしっかりと誰かに抱かれて眠っている感じなのだ。

母親の羊水のなかで浮いている胎児の様など言ったほうが適切かも知れないが、とにかくスッキリして家路につく私であった。

居眠りしていたベンチから駐車場に帰れば、妻と次女は既に車の中にいて何やら楽しそうにお喋りをしていた。その姿を見て改めて我が家の幸せを噛み締めた。しかし、あの眠りの何と深かったことか、また安らかだったことか。

南無大師遍照金剛

六十五番 三角寺（さんかくじ）

妻と一緒に参りした時だが、もう午後五時に近くて納経所も、今日はこれでお願いと云うタイミングであった。

本堂に行くとき若い僧が戸じまいの支度を既に始めている。般若心経もソコソコに納札箱に自分のお札を入れようとしてビツクリ。錦・金・銀のお札が全部で五枚も一番上に綺麗に並んで置かれているではないか。「宜しかったらどうぞお持ち帰り下さい」と云ってる様である。「折角だからお守りに頂戴しよう」という事で各々一枚ずつ頂いて帰る私だった。

私の前に参拝者は確かにいなかったし、直前に錦・金・銀の回数のお遍路さんが団体で来たとも思えない。「やはりお大師様が下さったのだ」と勝手な事を今もつて信じている。

しかし、どうして五枚もの錦・金・銀のお札が一度に置かれていたのか。どう考えなくても不思議だ。

南無大師遍照金剛

香川県
六十六番
涅槃の道場
八十八番

六十六番 雲辺寺（うんぺんじ）

本堂から大師堂までは少しばかりの坂道を登る。道幅は二メートル程だが両脇が山と植え込みで挟まれた一本道だ。

何時になく巡礼者が少ない日で私は一人で大師堂へと向かっていたのだが、ふと目の前に黒くて長い縄が一本道の右端から左端まで渡してあるではないか。へびだった！

大きな蛇が道を横断しているのだった。頭は植え込みの中で右側の石垣をまさに登り始めるところで、シッポはまだ左側の山の中にある。つまり二メートルを越える大物だ。

気が遠くなりそうなのを我慢して私は改めて彼のへびを見た。お大師様の化身ではあるまいかと、思わず「南無大師遍照金剛」と唱えた。

驚く様子も無くへびは悠然と私の前を横切り、やがて植え込みの中に消えていくのだが、黒い肌が眩しい程に光っていた。神々しくもあつた。

南無大師遍照金剛

六十七番 大興寺（だいこうじ）

松葉が三本の珍しい松の木が境内にある。「三鉢さんこの松」と言うのだそうだ。

そもそも三鉢さんこの松とは高野山の御影堂の前にある松の木を指すのだが、弘法大師が唐に渡って明州の港から密教法具の一つである「三鉢さんこ杵し」を、白身が受け継いだ密教を日本の国で広めるために相応しい地に飛んで行くようにと東の空に向かって投げたところ、高野山の松の木にかかっているのが分かり、その松が偶然に三葉であつたところに由来することが解つた。

私の母には姉がいて、私が「薰おばちゃん」といって慕っていた小学生の頃、「サンコの松や」と云ってお守り代わりに貰つた記憶がある。サンコって何だろうと、当時から不思議に思っていたが、ここ大興寺でやっと理解が出来た。叔母さん意外と物知りだったのだと感心させられた。

南無大師遍照金剛

六十八番 神恵院（じんねいん）・六十九番 観音寺（かんおんじ）

神恵院と観音寺は同じ敷地にあり、一箇所です。二つのお寺をお参り出来る誠効率
的な札所である。巡礼者にとっては勿論のこと、お寺さんにとっても一箇所の納経
所で二ヶ寺の納経を受け付けて納経料も二ヶ寺分をキチンと頂ける按配となってい
る。

人件費云々と罰当たりなことを云ってはいけないが企業経営の理論からすれば効
率のとしか云い様がない。

もともと神恵院は観音寺の敷地より一段高い位置にあつたのだが急傾斜の階段が
あつて少々シンドイ思いもしたものだ。しかし三回目の巡礼の頃から下に降りて来
て現在のレイアウトとなり非常に楽になった。新築の神恵院はコンクリートのお洒
落なデザインとなり、お経を唱えると良く反響して、自分のお経の声に自分が酔っ
てしまいそうになる。

時間のゆとりも出来たところで裏山に登り観音寺名物の銭型の砂山を観光するの
だが、何時の頃からか先を急ぐだけになった私でもある。

南無大師遍照金剛

七十番 本山寺（もとやまじ）

ご本尊の、ご真言が難しいお寺は三ヶ寺あることは六十三番吉祥寺で述べたが、難しい中でもナンバーワンが、ここ本山寺さんではないだろうか。

ご本尊の馬頭観音のご真言は「おん あみりと うどはん ばうん ぼった」なのだが何度お参りしても一度で言えず、思わず本堂に掲げられている宝号の書かれた揭示額を見てしまう。しかも頭の中では「ドドンパ バウンド バッタ」などという意味不明の音が聞こえてくる始末だ。私が高校生だったころ、ドドンパなるリズムが流行ったが、どうしてもドドンパと聞こえてしまうのである。さらにはバッタが飛んでいる（バウンドしている）とまで聞こえるのであるから私の罰当たり度も最高のお寺ではないだろうか。

自分の不謹慎さを心から反省しているのだが、「オン アミリト ドドンパ バウンドバッタ」と毎回云いたくなるのも困ったものだ。

南無大師遍照金剛

七十一番 弥谷寺（いやだにじ）

托鉢の三者三様

四国遍路をしていると、時々、寺の山門の前で托鉢をしている僧、巡礼者或いはそれと思しき人、又は、どう見てもそうとは思えない人に出会うものである。

私は彼らに出会うと、必ず百円硬貨を浄財することに決めている。学生時代に無銭旅行に近いことをやってのけ、宿の便宜をはかって貰い、食事までお世話になったことが度々なので、ご恩返しのできる気持ちも手伝っての行動であるが、もっと現実的な理由がある。高邁な思想のもとで自分を常に一定の状態に保つ事が、如何に難しいかを身をもって知らされた事があったからである。

あれは確か六十九番観音寺であったか、清潔な僧衣に身を包み、直立して読経している僧に出会った時は、なんの躊躇も無く浄財をしたのだが、その後尋ねた七十一番弥谷寺の山門前には、見るからにみすばらしい風体の老人がござの上に座し、ブリキのお椀を前に居眠りしていたのである。物乞いにしか見えないその様子に私は確かに嫌悪感を覚え、咄嗟にとった行動が、五十円硬貨をお椀に入れる事であった。何時も百円硬貨を探しても浄財するのに、その時は反射的に五十円硬貨なのだ、恥かしい事をしてしまったものである。

山門から本堂までは長い階段があり、私はずっと先程のことを悔いていた、身なりだけで判断して良いのか、どうして差をつけたのか、もしかすると、お大師様が

私をお試しになつたのかも知れないと考えるに及び、恐怖感にも似た戦慄が私を襲つて来た。

お参りもそこそこに、山門まで帰つてきたが、そこには例の老人の姿はなかつた。ただブリキのお椀はそのまま、先程入れた五十円硬貨もそのままであつたので、姑息とは知りつつも、もう一枚五十円硬貨を入れてその場から逃げるように離れたのであつた。

ところがお話はこれでは終わらなかつた。駐車場まで帰ると、そこには彼の老人が落ち葉を一生懸命掃いて掃除して居るではないか、私は心から自分の取つた行動を悔やんだ、許されるものではないと知りつつ、思わずその老人の背中に手を合わせたのは云うまでもない。人を見掛けで判断してはいけない事は十分理解していたのに情けないと思つた。

翌年出会つたもう一人の托鉢は、誠に滑稽な人であつた。六十四番前神寺のこと、この日は家内と一緒にあつた、山門に座っている御仁は、どう見てもウサンクサイ御仁なのだ、托鉢のお椀はなく、即席麺の発砲スチロールのお椀が置いてある。よく見ると「どん兵衛」などと印刷されている。お金は何にも入っていない。しかし昨年心に誓つた事は忘れない。百円硬貨を入れてみるが、件のオジサンしらんぷりである。

その場を過ぎたところで後から来た家内が苦笑しながら一部始終を伝えてくれたのだが、そのオジサン、私が背を向けた途端、どんぶりを振つてみて、百円硬貨と

「判明するや、素早く回収してがま口に収めたとか。これでもお大師様のお試しなのかと平常心を装うもやはり納得がいかない気持ちであった。帰り道、もう一度会った時には、門前で立ち小便までしているのを見るに及んでは、許せない気分も最高潮に達したが、結局何も云わず無視してその場を離れた。三者三様の托鉢、全てお大師様の御心なのか。」

拙著「あまやどり」より
南無大師遍照金剛

七十二番 曼荼羅寺（まんだらじ）

大きな円形に広がる松が突然に枯れた。平成十五年か十六年のことか。

私が始めて四国遍路を始めた時は、妻と次女が同行してくれたのだが、その時も大きな丸い松に驚いた。二重・三重に円形に刈り込まれた松が重なり合ってまるで巨大な番傘を広げている様な格好である。直径は十メートル程あったろうか。

その松の側には古い井戸があり、これまた年期の入った鋳物製のポンプが乗っていた。まだまだ現役で押せばチャンと水が出た。娘が面白がって何度もガツチャン・ガツチャンと押して遊んでいたことを思い出す。その後何年かしてポンプごと井戸は無くなった。

そして二、三年後に松は枯れた。ご多分に



漏れず松くい虫の被害だったと聞いている。しかし、関係は無いと思うが井戸を潰したことにより地下の水脈が微妙に変化して松の根に影響があったのではなからうか。勝手な憶測は関係者の皆様に失礼とは思いますが、どうにも気になるところである。

松が枯れたその年に、納経所でいつも朱印を押して下さる上品なおバアちゃんに、「松、枯れてしまったんやね」と私は問い掛けた。「枯れてしてもてなあ」と寂しそうな顔をして彼女が答えたのを思い出す。悪い質問をしてしまった。それにしても見事な松だった。

南無大師遍照金剛

七十三番 出釈迦寺（しゅっしゃかじ）

奥の院である捨身ヶ嶽禪定へ一回だけ登った。禪定で拝むとすばらしい記憶力が得られ学業成就や、もの忘れに大変なご利益があると聞いたのが動機である。

秋の紅葉が美しい時期を選び、好天のもと妻と次女の三人でのドライブであったが禪定までは辿り着いたものの、その先の捨身ヶ嶽頂上を極めることは叶わなかった。娘が怖がってクサリ場を登れなかったからである。

それもその筈、その一ヶ月前の石鎚山登山の時に無理やりクサリ場を登らせ、大きな恐怖感を根付かせてしまった為であった。体の小さな娘には最初から無理があったのを私か強行したのが良くなかった。友人夫婦と一緒だったので協力してもらって最後は両手を挿んで引っ張り上げる格好となったものだから心底、怖かったのだろう。きつとクサリ場のトラウマになつていたのに違いない。

捨身ヶ嶽の眼下には讃岐平野と瀬戸内海を一望できる絶景が広がっていた。綺麗だった。そして私の物忘れに關しては、ご利益が認められなかったが、娘の学力は順調に成就していった様に思われる。クサリ場のトラウマはその後、封印されたままだ。

南無大師遍照金剛

七十四番 甲山寺（こうやまじ）

ここまで各寺にまつわるエピソードを著してきたが、甲山寺に関しては、これと言った特筆すべき話がなかった。従って十六回目の巡礼の際には境内のベンチで休みながら、何か無かったかと思いついてみるのだが不思議な事に私の頭の中の引き出しにはこの寺だけが空っぽのままなのだ。無いものは思い出しようもないので諦めることとしたが、その時ふと、長女・小百合の出番が今までも、これからも全くない事に気がついた。

次女より十五歳も年上の長女は私が四国遍路にご執心となった頃にはすでに成人しており、遍路をするような環境でもなかったのだが、とにかく私達夫婦には付き合ってはもらえなかったという方が正しいのかも知れない。

しかし同じ家族の一員でありながら八十八編の話題に一回も登場しないのは、如何にも不公



平である。なにかの話題はあるはずと頭を叩くのであったが、ふと長女に侘びたいことを思い出した。「金魚すくい」に関しての侘びである。

私は幼い頃、飼っていた十姉妹のつがいを不注意で死なせてしまった。そのため、生き物は絶対に飼わないと誓いを立てていた都合から、金魚すくいでも遊んでも、すくった金魚を持ち帰ることはしなかった。せつかくすくった金魚でも家に持ち帰ればたいいの場合、翌朝には腹を上に向けて浮かんでいたり長くても二、三日の内には死んでしまうのである。

楽しく遊んだ娘が自分のすくった金魚を持って帰りたくない筈がない。しかし私は何時も冷たく「持って帰ったらアカンで」と云って聞かせていた。並んで遊ぶ子供たちはビニールの袋に入れてもらった金魚を嬉しそうに持ち帰るのだが私は娘にそれを許さなかったのだ。今になって反省しても仕方がないのだが、お椀に入れたすくったばかりの金魚を水槽に戻す時の娘の寂しそうな、あるいは口惜しそうな表情は今でも私の脳裏に焼きついている。

「パパが飼ってはいけないうって・・・」と独り言も言いながら金魚にさようならを云っていた。さぞかし無念だったろうと今の私には理解が出来るが、当時は一種の教育でもあるかの如き大誤解をしていたのである。

長女には今後改めて謝るつもりはないが小さな十字架を背負ってゆく覚悟はしている。孫でも出来ればその孫には金魚を持ち帰らせるつもりだ。

南無大師遍照金剛

七十五番 善通寺（ぜんつうじ）

大駐車場の入り口に喫茶店「ミルクホール」がある。名前も時代がかつてはいるがママさんも、これまたかなり時代がかつてはいる御仁だ。

十年も前の事、妻と娘と一緒に立ち寄ったのが初めてで、娘がフロアに落ちている百円硬貨を見つけ「おばちゃん百円、落ちてたよ」とママに差し出すと彼女は「ラッキー！」とひょうきんな仕草をして貯金箱がわりの大きな瓶にチャリンと入れるのだった。

その後、善通寺さんにお参りの都度、この店を訪ねるのだがママさんかなりの競馬好き。お客と馬の話をしている時の目はキラキラしている。「何の趣味もないから馬くらい やらせてよ」が口癖である。

平成十八年六月二十四日にも私はミルクホールにいたのだが、ママに「アンタぜんぜん歳をとらないねえ」と褒めてもらった。「十年前とはエライ違いだよ。時々会っているから分からないだけ」と答えておいたが、ついでに「ママこそ若いねえ」と、こちらは半分以上がお世辞なのだがお返ししておいた。彼女はマンザラでもなさそうにニツコリするが、やはり老いは隠せない。洋服の襟からのぞくババシヤツが何よりも雄弁に時の経過を物語っていた。

七十六番 金蔵寺（こんぞうじ）

パチ・パチ・パチ・パチ・・・と大きな音を立てながら本堂の前に吊り下げられた巨大な数珠の玉が、天井の滑車をくぐる度に落ちてくる。全長は五く六メートルもあるうか、とにかく大きな数珠である。

多くの巡礼が回すものだから、パチ・パチの音を聞きながら納経する事になり誠に心地よい響きでもある。そして、何時お参りしても善男善女が数珠を回す音がパチ・パチ・パチと境内に響いている。

初めての巡礼で、この数珠を発見した次女は、いつまでも回し続けるものだから「いい加減にしなさい」と叱ったくらいだった。私も娘と同様にいつまでも回し続けたい衝動にかられるが、巡礼十回目を超えたあたりからは遠慮している。

南無大師遍照金剛

七十七番 道隆寺（どうりゅうじ）

七十七番の数字が意味するもの、それは八十八分の七十七。つまり巡礼もあと八分の一の十一ヶ寺を残すのみとなるのだ。また道隆寺をお参りする日は、たいてい八十二番、根来寺まで進むので残り六ヶ寺の一日を残すだけとなり、ここまで来れば何故かホッとするのである。

ラッキーセブンが二つもあるお寺さんなんて、どんなにか幸運なご利益を頂けるのだろうかなど、バチ当たりな発想をする私であったが、恐れ多くも乃木大将ゆかりのお寺であるとか。どうりで風格のある、どっしりとした雰囲気である。

南無大師遍照金剛

七十八番 郷照寺（ごうしょうじ）

門前に「地藏餅」という有名な大福餅屋があり私はいつも土産に求める事にして
いる。

平成十八年三月に郷照寺を尋ねた時も立ち寄り、草餅を五個と白い餅を五個注文し
ようとするのだが、よく見ると白い餅は残りが六個なので五個を買うと一個だけ取
り残される状態になる。

一個残される餅がなぜか不憫に思えて店のオバチャンに白を六個と草餅を四個に
変更を頼むと、オバチャン、私の気持ちを察して曰く「ありがとう。白一個はオマ
ケにしとくから」と結局、白い餅六個と草餅五個を千円で頂いた。

お店の前にはお地藏さんを祀ってある祠があるので買い物後にお参りし、儲かつ
た百円をお賽銭にして家内安全、夫婦円満を祈んだ。オンカカカビ サンマエイ
ソワカ・・・

南無大師遍照金剛

七十九番 高照院（こうしょういん）

小ぢんまりした敷地の中にコンパクトに本堂・大師堂が配置されている関係上、一ヶ寺に要する時間が短くて済みスタンプラリーもどきの私の巡礼にとっては有難いお寺である。

ただし境内の松の木の根っこに、いつも陣取っている「絵描き」を自称するオジサンがいる。八十八ヶ寺のデッサン画を販売するべく並べてはいるが托鉢にしてはどうもウサンクサイ。

肝心の絵は売れている気配もなく、専ら日向ぼっこを楽しみに境内に住み着いている様子であるが、ある秋の昼下がりに、私は絵を購入する気持ちはないものの何かひっかかる所があつてオジサンのお腕に百円硬貨を浄財させてもらった。すると

「ありがとう、これあげる」と云つてオジサンから小さなドングリを頂いた。「何故ドングリなのだろう」と思ったが、手のひらの中で、そのドングリは暖かかった。納経所には「ニセ絵師にご注意」と張り紙があつたが、あのオジサン、まんざら悪人でもなさそうだ。

南無大師遍照金剛

八十番 国分寺（こくぶんじ）

ふと気がついた。七十九番高照院のご本尊は十一面観音様、ここ国分寺は千手観音様そして八十一番さん以降八十七番、長尾寺まで千手観音様、聖観音様、十一面観音様がずっと並んで都合、九ヶ寺に亘り観音様が連続している。

ところで般若心経の最初は「観自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五蘊皆空度一切苦厄」で始まり、その説くところは「観自在菩薩がかって仏の智慧の完成を實施された時、肉体も精神もすべては空（くう）である」と照見され、あらゆる苦悩を克服されました」とある。

成る程と思った。つまり「発心の道場」から始まる四国巡礼は「修行の道場」「菩提の道場」を経てついには「涅槃の道場」へと移行し、その間、巡礼者は弘法大師様と二人連れであり身も心も昇華して行くという教えの通り最後の九ヶ寺では観音様が最終段階のお導きをして下さっているのではと考えたのである。

般若心経を理解する為にいくつかの書物を読んだが、いつも漠然として何も理解出来ないでいる自分がいたのだが、最初の一文にすべてが著されていることに気がついた。

つまり我々人間は肉体も精神もすべては空であることに気がつけば、あらゆる苦

悩を克服できるという事ではないだろうか。

スタンプラリー宜しく始めた四国巡礼だが、回を重ねるに従って何かの雰囲気的なものを感じ始めた私であった。「色即是空 空即是色」が何を意味するものであるかヒントを得た様な気持ちにもなった。七十九番から八十七番までの観音様の並びは巡礼者にとっては完成段階研修とも云えるのではないだろうか。

南無大師遍照金剛

八十一番 白峰寺（しろみねじ）

縁起によれば衰退の歴史を繰返した後、本堂は慶長年間に高松藩主・生駒家が再建した。また大師堂は文化八年、松平頼儀公が再建したともある。

改めて大変、格式の高いお寺さんであった事を知った。どうりで門構えとか御堂の配置などに重厚なものを感じてはいたものの、もう十五回も巡礼しているのにも拘わらず何も知らずにいた私だった。スタンプラリー巡礼を恥じる次第でもある。

しかしスタンプラリーに徹していれば思わぬ発見をすることもある。或る日のごとお参りを済ませて納経所に行き、ふと見ると若い憎が携帯電話でメールを打つのに余念がなかった。叱責するつもりはサラサラないが何を話しているのだろうかと詮索したくなる。

「コンバンヒマカ ノミニイカナイカ」と仲間に連絡をとっているのだろうか。可愛い奴だと思わず笑ってしまう私だった。

南無大師遍照金剛

八十二番 根来寺（ねごろじ）

牛鬼で有名なこのお寺、門前には少しばかりユーモラスな像まであるのだが、十年以上も前に次女を連れて一回目の巡礼をした時に彼女が怖がったことを思い出し、夕食をとりながら次女に根来寺を覚えているかと尋ねてみると、「ああ、石垣の間からお水が出ていたお寺ね」との返事が返って来て拍子抜けした。

牛鬼の話をつかり易く言って聞かせ記念写真まで撮ってやったにも拘わらず次女の返事は、およそ見当違いのものだった。

後日、根来寺を訪ねた際に注意深く見てみると、山門を入り、石段を下り楓の紅葉が美しいトンネルをくぐると、すぐ登りの石段となる、その石段の途中に私は次女の「お水」を発見した。石垣を築いた斜面の中ほどに水抜きのためかゴムホースが刺してあり、そこから一筋の流れが小さな瀧となつて落ちていゝるではないか。

折りからの紅葉の季節、苔むした石垣の上にパチャパチャと音を立て流れ落ちる水は何とも言えない風情を醸し出していた。

子供の感受性とはすごいものだと思つた。

南無大師遍照金剛

八十三番 一宮寺 (いちのみやじ)

大師堂の中で、いつも静かに座っているお婆ちゃんがいる。大きな鉦の側にいて巡礼がお経を詠み終わるのを待って、「コーン」と鳴らして下さる。

又、そのタイミングが誠に絶妙なのだ。もったいない事に、何だかお大師様が納経のお礼を言ってくれている感じになる。

お婆ちゃん、いつまでもお元気で・・・

南無大師遍照金剛

八十四番 屋島寺（やしまじ）

女房のお友達が、私の四国遍路にご執心なのを知って高野山で求めたという高野檜で作った数珠をプレゼントして下さった。手首に巻くスタイルのもので、その後の巡礼の際にはいつも身に着けさせてもらい、私のお気に入りグッズでもある。

その数珠が一度、大変なことになったのが、ここ屋島寺だった。

屋島には名物の瓦投げがあり参拝の都度、私は楽しむのだが、或る日のこと、その事件は起こるのだった。

瓦投げはちよつとしたコツがいる。右手のスナップを効かせてオーバーハンドで直球を投げる要領で投げるだが、その日の私は何時に無く気合が入っていたため思いっきり腕を振った弾みに、手首に巻いていた例の数珠まで一緒に飛ばしてしまったのである。



一度は諦めたが、よく見ると目の前の木の枝に数珠はかろうじて引つ掛かっているではないか。ところが瓦投げの広場は断崖絶壁ですぐ前の木とはいえ、簡単に手が届く場所でなく、考えた末に付近に落ちていた棒を、数珠の輪に通して回収しようと思ふと果敢にトライする私だった。しかし一難去ってまた一難、無常にも棒は一度、数珠のワツカに入ったものの回収にまでは至らず、悪い事に数珠はもう一段低い枝まで落ちてしまったのである。

だがここで諦めないのが私の真骨頂。今度は柵を乗り越えての再挑戦となった。断崖絶壁の上で回収劇は繰返され、やっと成功したが女房は本気で心配していたらしく、柵の内側に帰って来ると「お父さんたら、どうしてそんなに危ないことをするの」と私は叱られた。しかし身内に叱られるのは仕方がないことだが、周りの野次馬には閉口した。事情を知らない彼らは、投げた一個二十円の瓦を拾っているぐらいに思っていたのに違いない。

数珠は今も巡礼の際には身に着けている。しかし屋島寺での瓦投げは、この事件からきっぱりと止めている。お大師様のご加護も一度だけということだ。

南無大師遍照金剛

八十五番 八栗寺（やくりじ）

ロープウェイの山上駅で銀行員時代の友人K君の三人組とバッタリ。平成十八年三月十八日のことである。たまたま私の誕生日なので、「もうすぐ赤いチャンチャンコだ」と来るべき還暦の話題に及び、はたまた健康問題とか、持病、投薬とおよそ若い時代に交わした話題とはエライ違いの話が弾んだ。

ロープウェイの発車時刻は毎時0・15・30・45分と決まっているので私は三十分でお参りを済ませ二便後には乗車して次の札所へ急ぐのが恒例なのだが、この日だけは久しぶりの友人との再会だったので一時間を山上で費やして四人一緒に般若心経を詠むことになる。後目、友人から、どこかに癌が見つかったので病氣平癒の祈願に八栗寺を訪ねたのだと理由を聞かされた。時間にゆとりを作り、友人と一緒に参拝して良かったと思った。彼の今後の健勝を祈りたい。

南無大師遍照金剛

八十六番 志度寺（しどじ）

銀行の秘書課勤務だった頃、BOSSの随行で高松へ度々出張した。或る日の帰り道BOSSが「志度寺に寄ってみよう」と言い出し、立ち寄る事となる。

当時は私も若く四国遍路にも八十八ヶ所にも全く興味がなかったので、志度寺の何たるかさえ知らなかった。

BOSSが何かと私に説明してくれるのだが「ハア さようでございますか」の返事ばかりしていると「君も、もっと勉強しておきなさい」と叱られた。

海女の墓が在るはずだと彼は探し始めたが、結局わからず帰路についた。

その後、十五年を経て最初の巡礼として志度寺をお参りした際、裏の駐車場の近くに件の海女の墓を発見した。今ならBOSSに「海女の墓はこちらです。因みに海女の墓の由来は・・・」とか言って、うまく説明できるのだが残念ながら偉大なBOSSは他界している。面目躍如の機会は永遠に失われたのである。

南無大師遍照金剛

八十七番 長尾寺（ながおじ）

毎年十一月には菊花展が境内で催される。だからこの季節を妻といつも楽しみに
していて参拝する。他寺にも菊花展はあるが一番印象に残るのが、ここ長尾寺なの
だ。

普段は八十八番の結願を直前にして、心ここにあらざ状態で通り過ぎるお寺なの
だが、菊の花の時期だけは別だ。亡き母も菊が好きで自宅で栽培していた時期があ
ったことも思い出した。菊はまことに手間のかかる植物だそうで一年の努力が秋の
数週間しか報われないのだそうだ。母が一生懸命、世話をしている姿を懐かしく思
い出した。

南無大師遍照金剛

八十八番 大窪寺（おおくぼじ）

母のカメラの中に残されていたフィルムだが、七回忌を迎えようとしていた或る日現像してみた。何だか気乗りがしなくて二年間も放っておいたものだが、そのままでは母は無念を感じているのではないかと、意を決して写真屋へ持っていった。

写真は大窪寺で撮影されたものだったが、結願した記念であろうか巡礼仲間と二人で写っている。折からの紅葉が美しい門前でのものだった。

この日の夜、母は自宅の玄関まで辿り着くや「お大師さんのお蔭で帰って来られた」と云ったまま動けなくなり、四ヶ月の闘病後、帰らぬ人となる訳だから、母が写った最後の写真であることに間違いない。

見たところ元氣そうな姿で、カメラの位置に不満なのか「もつと右の方から撮ってくれ」とでも指示している様子が一枚あって、その直後だろうか、おすましたポーズの一枚が写っていた。カメラを持たされた人の仕草までが想像されて面白い。



この写真は、私の巡礼アルバムの最後のページに貼ってある。もちろん妻と娘が母と同じポーズできまっている写真も一緒だ。

南無大師遍照金剛

完

あとがき

この作品は、持山保信氏のエッセイであり、先に出版された「あまやどり」「通り雨」に続く三作目ということになる。四国四県の八十八ヶ寺めぐりにまつわる自身のお遍路体験を他の作品と同様、軽妙な語り口でつづっている。いわゆるお寺さんの解説書やパンフレットではないし、写真集でもないのです、これを読んだからと言ってお遍路時の参考になるとはとうてい思えないのだが、私の様に遍路経験がない者にとつても、個々のお寺の様子がなんとなく浮かんでくるような面白いエピソードがつづられている。

そもそも、「まえがき」によれば、妻子とともに一九九七年の春、母親の七年忌を前に始めた巡礼のための八十八ヶ所廻りのお遍路行、それから十六回を数え、それまでのメモ書きなどをいったん整理してまとめておこうということとで本書の誕生となったようである。したがって、ところどころに現在と過去がいきつもどりつするような箇所があったり、前作の読者であれば「あれ？どこかで聞いたような・・・」が現れる。それでも、読んでいてほんのりとほほえみたくなるような気持ちにさせられるのはさすがである。

お寺ごとの記述は長すぎず、短かすぎず、ときには特筆すべきものがみあたらず、

本当に何も無いかのようにさらっと終えたり、別の話題にすりかえたりしており、そこがまた読み手にとつても負担感がなく、読みやすいものになっている。

また文中に登場する人物は、たまたま出会った人達、住職、納経所の受付係や職員、オジサン、オバサン、若いヤンキー女性、遍路をする若い男性、母娘、大学や職場の先輩などいろいろであり、その人々とのさりげない会話や観察から生じた想いなどが正直に書かれていて面白い。読む者にとっては「あ、私にも似たようなことがあったな」とか「あんな人いるよな」とか、「へ〜そんなこともあるの?」などと、いかにもあたりまえにいる人々とのあたりまえのやりとりが読者の気持をほぐしてくれるのである。そんな出会いがめつきり減ってきたこのごろ、読んでいてほっとさせられ、世の中まだまだまんざらでもないなと思わせられるのである。

一方、同行している家族についても気遣いを忘れていないところが嬉しい。実名でたびたび登場する次女の春奈さんや一度しか出てこなかったものの長女の小百合さんとのエピソードはいかにも家庭人らしい著者の優しさを感じさせる。ただ本人の想いと家族の想いは違うかもしれないと少し意地悪な感情も湧いて来る。奥方を含めて家族全員からの感想を聞いて見たくなる。「楽しかった」「おもしろかった」「一緒に行けて良かった」だけでないところが聞きたくなる。このことも想像するだけで楽しみな作品だった。

著者は、年齢と健康上の理由から、もうこれでしばらく作品作りはやめるとのことだが、「あまやどり」「通り雨」や本作のように、日常生活の中で出会うさまざまな出来事をこれからも書き続けて行つてほしいものだ。どこにもあるようなやさしいことを、誰にでも書けそうな平易な文体で書くのはとても難しいものだからである。

平成二十五年十一月 木場 薫

持山保信（もちやまやすのぶ）

昭和 23 年 生まれ

徳島市末広 4 丁目 7-32 在住

昭和 46 年高崎経済大学卒業後、
郷里の銀行に勤務。

2 社の会社役員を経て現在、
損保会社に勤務。65 歳。

妻と二人暮らし。

著書

「あまやどり」「通り雨」

八十八ヶ所巡礼雑感

平成二十五年十一月十一日 初版第一刷

著者 持山保信

発行者 木場 薫

発行所 有限会社 楽学研究社

沖縄県那覇市宇栄原三丁目二十一番七号

電話 098 | 857 | 5201